下山田道下遺跡 発掘調査報告書

県営ほ場整備事業（加治川地区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書　Ⅴ

２０１３

新発田市教育委員会

例　　言

1．本報告書は，新潟県新発田市下山田に所在の下山田道下（しもやまだみちした）遺跡の発掘調査記録である。

2．調査は，県営ほ場整備事業（加治川地区）に先立つもので，新潟県新発田地域振興局の委託を受けた新発田市教育委員会が調査主体となり，現地調査を平成 23 年6月2日から7月 20 日に実施した。

3．発掘調査の経費は，新潟県新発田地域振興局と新発田市が結んだ委託契約に基づき，総額の 90%を事業者である新潟県新発田地域振興局が負担し，文化財担当部局分である総額の 10%についてはその半額を国庫補助，残りを県費補助および市費で負担した。

4．遺物・記録類は，新発田市教育委員会が一括保管している。遺物の注記は「下山田道下」「下山田」とし，必要に応じグリッド・層・日付等を記した。出土遺物は全点注記・分類作業を終えている。

5．出土遺物の図化作業は,井澤昇･鈴木暁（新発田市教育委員会）が,写真撮影は鈴木が行った。拓本･トレス及び挿図･図版の作成は，調査員および調査員の指示のもと整理作業員が行った。

6．本書の執筆は，第Ⅰ・Ⅱ章を一箭義貴（新発田市教育委員会）が，残りを鈴木が行った。全体の構成は鈴木が取りまとめた。

7．第Ⅴ章の須恵器胎土分析は，株式会社第四紀地質研究所に業務委託し，その結果を掲載した。

8．本書に掲載の地形図は，国土地理院発行 1/50,000 地形図「新発田」「中条」および加治郷土地改良区作成の地形図であり，必要に応じ縮小している。方位は，第1図では図の天が真北を，それ以外では，記号の方向が磁北を示す。

9．遺物は掲載順に若い番号を振り分けている。なお，現地での遺物取り上げ時に割り当てた「遺物№」とは別である。

10．土色の観察は，『新版標準土色帖』（小山・竹原 1967）を用いた。

11．発掘調査から本書の作成にあたり，下記の諸氏・機関から多くのご協力・ご支援を賜った。記して感謝の意を表する次第である。（順不同　敬称略）

伊藤喜行　小林　弘　大滝一博　笹澤正史　春日真実　関　雅之　高橋春栄　藤巻正信
増子正三　水澤幸一　吉井雅勇　渡辺鉄也
新潟県教育庁文化行政課　新潟県新発田地域振興局　加治郷土地改良区　下山田地区自治会

目　　次

第Ⅰ章　遺跡の位置と周辺の遺跡
1　遺跡の位置と立地 …… 1
2　周辺の遺跡と歴史的環境 …… 1

第Ⅱ章　調査の概要
1　調査に至る経緯 …… 3
2　調査体制・方法と経過 …… 4
3　整理作業・層序 …… 5

第Ⅲ章　遺構
1　遺構の概要 …… 7
2　遺構各説 …… 7

第Ⅳ章　遺物
1　出土遺物の概要 …… 15
2　器種分類 …… 15
3　遺構出土の遺物 …… 16
4　遺構外出土の遺物 …… 18

第Ⅴ章　須恵器胎土分析 …… 31

第Ⅵ章　ま と め …… 35

挿　図　目　次

第 1 図　下山田道下遺跡の位置と周辺の遺跡…… 2
第 2 図　調査区と確認調査トレンチの位置…… 6
第 3 図　基本土層 …… 6
第 4 図　遺構全体図 …… 8
第 5 図　1～6区の遺構（1） ……10
第 6 図　1～6区の遺構（2） ……11
第 7 図　17 ～ 20 区の遺構 ……12
第 8 図　21 ～ 23 区の遺構 ……13
第 9 図　土器分類図（椀・杯類） ……16
第 10 図　遺構出土土器 ……17
第 11 図　遺構外出土土器（1） ……19
第 12 図　遺構外出土土器（2） ……20
第 13 図　遺構外出土土器（3） ……21
第 14 図　遺構外出土土器（4） ……22
第 15 図　遺構外出土土器（5） ……23
第 16 図　遺構外出土土器（6） ……24
第 17 図　遺構外出土土器（7）・その他の遺物 …25
第 18 図　須恵器胎土分析関連グラフ ……34
第 19 図　土師器無台椀の器高指数(南集中資料)…35

表　　目　　次

表　1　遺構観察表 ……14
表　2　遺物観察表 ……26
表　3　胎土性状およびタイプ分類表……33
表　4　胎土分析化学分析表 ……33
表　5　胎土分析組成分類表 ……34

図　版　目　次

図版 1　調査区遠景，基本土層，調査状況，出土遺物
図版 2　発掘調査の状況・検出遺構（1）
図版 3　検出遺構（2）・完掘状態
図版 4　出土遺物（1）
図版 5　出土遺物（2）
図版 6　出土遺物（3）
図版 7　出土遺物（4）

第Ⅰ章　遺跡の位置と周辺の遺跡

１　遺跡の位置と立地

新潟県新発田市は新潟市の東方約 25km に位置し，総面積が 532.82 ｋ㎡，人口は約 10 万２千人の地方都市である。市の中央部にある旧新発田藩の城下町を中心とした市街地と，周辺の農村地帯から構成される。

市域は，新潟平野の一部をなす平野部と，東縁の五頭山地・櫛形山脈・飯豊山地により構成される。平野部は，東側の山地から流下する加治川水系の河川作用による台地・低地と，海岸線に平行な砂州・砂丘列のある海岸平野，および潟湖の干拓地などにより形成されている (国土地理院 1993)。

下山田道下遺跡は，今泉川の支流のひとつで櫛形山脈から流れ出る緋雉川によって形成された小扇状地の扇端部に立地する。標高は７～８ｍで，南南東から北北西へと緩やかに傾斜している。遺跡の北東側には櫛形山脈の支尾根である低丘陵が延びており，遺跡と丘陵との間には未分解腐植土（ガツボ）が厚く堆積する後背湿地が広がっている。また，遺跡の北側および西側には , 江戸時代中期に干拓された旧紫雲寺潟（塩津潟）に面した三角州状の低地が広がっており，遺跡の立地する扇状地は低地に張り出した地形といえる。なお，この潟の生成に関しては青田遺跡の発掘調査に際して行われた地形発達過程の研究から，９世紀頃に発生した大地震による地盤沈降で既存の潟が拡大した可能性が高いと指摘されている（高浜・卜部 2002)。遺跡が営まれた時代に潟がどの程度の広がりをみせていたかは明らかにはしえないが，本遺跡の立地を考えるうえにおいては密接な関係のもとにあったと推察される。

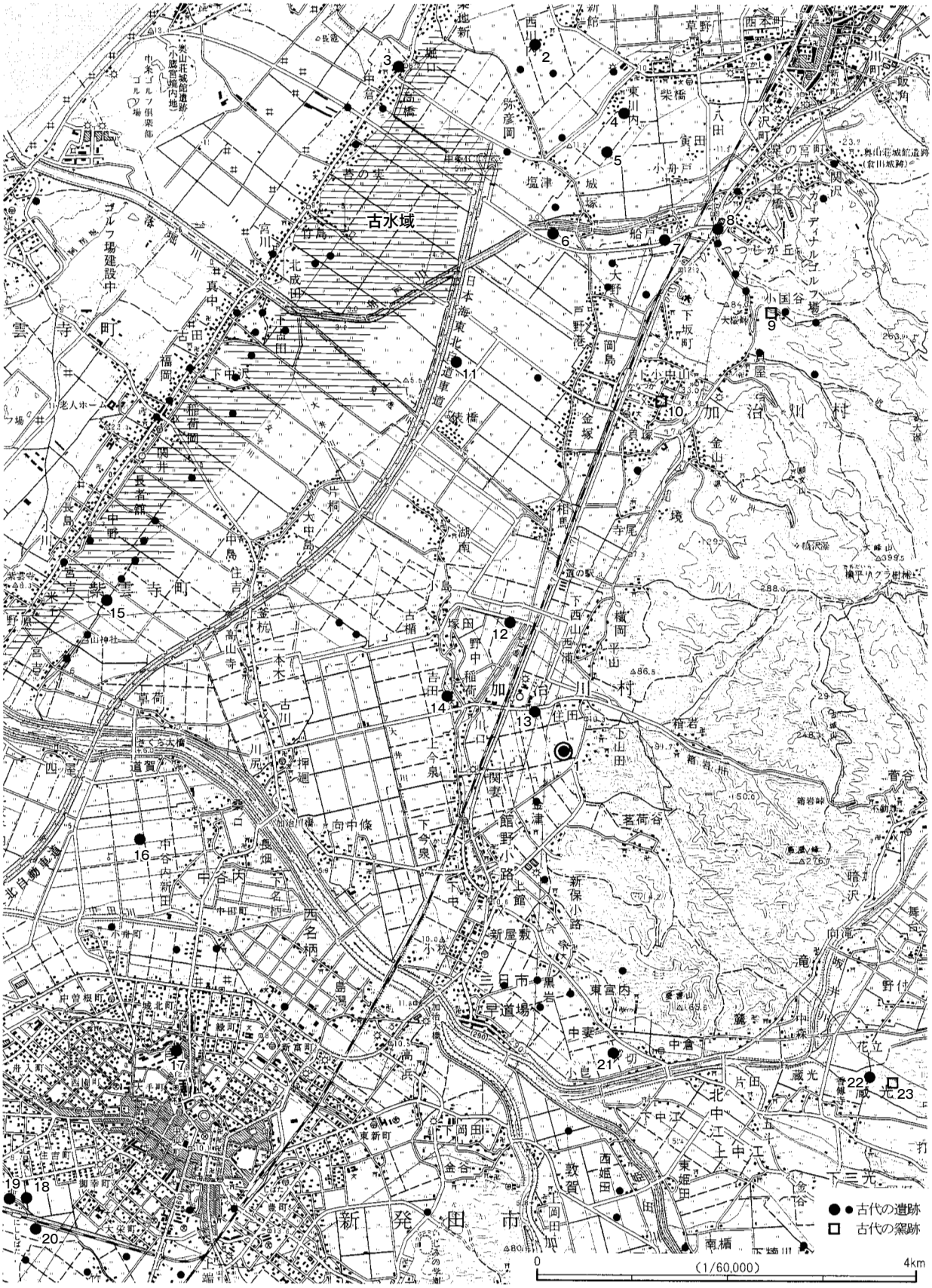
２　周辺の遺跡と歴史的環境

本遺跡では，古墳時代前期と平安時代前期という離れた二つの時代の痕跡が確認された。第１図には古墳時代から平安時代までの主要な遺跡を示した。本遺跡の所在する新発田市北西部から胎内市南部にかけての地域は，沖積平野に張り出した加治川・胎内川の扇状地と，櫛形山脈西麓の微高地，そして海岸砂丘列に囲まれた低湿地からなる。図からは，各遺跡が扇状地扇端部，潟湖周辺や河川の自然堤防，砂丘の縁辺など，地理的好条件下に立地・分布していたことが見てとれる。

古墳時代前期で注目されるのは，胎内市城の山古墳とその周辺の遺跡である。同古墳は直径 41 ｍの円墳で，近年の発掘調査により豊富な副葬品が出土し注目される。本遺跡の付近にも野中土手付遺跡 (12)･七社遺跡 (13) など，３～４世紀の集落が断続的に存在し，古墳時代前期の遺跡は少なくない。

平安前期の遺跡では，水上交通に関連する官衙関連遺跡と考えられている蔵ノ坪遺跡（８）が注目される。この近隣には，これに先行する船戸川崎遺跡（６）・船戸桜田遺跡（７）も営まれており，川跡に面する建物や多量の土器のほか木簡・墨書土器・祭祀具などが見つかっている。本遺跡周辺でも野中土手付遺跡・七社遺跡・家ノ内遺跡（17）が分布し，前二者では木簡等も出土しており下級官人の存在を推察できる。これらから本遺跡周辺は，当地域における中心的な役割を持つ地区に位置していた可能性が考えられよう。また，今泉川の上流側には太田遺跡（21）が位置する。発掘調査の結果，土師器椀を主体とし本遺跡と近似した土器構成を示している。

次に，遺跡の存続という観点から平安時代のこの地域を見ると，前期（９世紀）までの遺跡は多数存在するものの，明確に中期（10 世紀）まで連続するのは桑ノ口遺跡（16）以外，発見されていない。よって，９世紀～



1　下山田道下遺跡　2　西川内南遺跡　3　中倉遺跡　4　屋敷遺跡　5　大塚遺跡　6　船戸川崎遺跡　7　船戸桜田遺跡　8　蔵ノ坪遺跡　9　貝屋窯跡
10　下小中山窯跡　11　青田遺跡　12　野中土手付遺跡　13　七社遺跡　14　家ノ内遺跡　15　王子山遺跡　16　桑ノ口遺跡　17　新発田城第10地点
18　荒神裏Ａ遺跡　19　荒神裏Ｂ遺跡　20　神明裏遺跡　21　太田遺跡　22　丸山Ａ遺跡　23　ホーロク沢Ａ・Ｂ窯跡

第１図　下山田道下遺跡の位置と周辺の遺跡

10 世紀の間に断絶があると想定される。

この画期を生み出す要因の一つとなったと考えられるのが地形の変動である。9 世紀頃に起こった大地震により潟が拡大したと考えられているのは先述のとおりだが，9 世紀は概して地震活動の活発な時期であった。史料上からはこの他にも，弘仁 9 年（818）8 月に上野国を中心とする東国で，貞観 11 年（869）5 月には陸奥国で大地震があったことが確認できる。加治川以北の地域もこうした日本列島規模での変動の影響を受けたことは十分考えられる。

『日本三代実録』貞観 5 年（863）6 月 17 日条には，越中国・越後国で発生した地震に関する記事があり，潟が拡大した要因の有力な候補となっている。同日条には「陵谷易処。水泉涌出。」（丘陵と渓谷が入れ替わり，水が涌き出した）とあり，かなり大規模な地震であったことがうかがえる。しかし，地震後に越後国に対する賑給や租税の免除等が行われたことを示す史料が見当たらない一方，被災地に越前国が含まれているなど，被災範囲には不明な点が多い。また，「陵谷易処」は中国の故事（社会秩序が大きく変わることの意）であり，修辞的文言の可能性も否定できないことから，地質学的調査によって確認された地震痕跡と文献に残されたこの地震記事とを安易に結びつけることは現状では難しいといえよう。

第Ⅱ章　調査の概要

1　調査に至る経緯

試掘・確認調査　下山田道下遺跡は，平成 10 年 12 月に県営ほ場整備事業に先立ち，加治川村教育委員会（当時）の分布調査により遺物散布が認められ，試掘対象地となった。その後，平成 17 年 3 月に試掘調査を実施し，遺物包含地として周知された。平成 17 年 12 月と同 19 年 1 月にも分布調査も行い，遺跡範囲をさらに拡大した。

平成 20 年 10 月には，県営ほ場整備事業（加治川地区）に伴う範囲確認調査を新発田市教育委員会（以下，市教委）が行った。その結果，遺跡は約 150 m幅で東南から北西へ細長く延びていることが判明した。また，遺跡範囲は 2 箇所に分かれることが確認された。立地条件が異なることから北側を分割し，七社遺跡とした。

以上の調査結果に基づき，下山田地内の事業予定地にかかる埋蔵文化財包蔵地の対象範囲を確定し，その取り扱いについて新潟県新発田地域振興局農村整備部（以下, 県振興局）と市教委との間で協議を行った。その結果，面工事を行う部分については保護盛土施工（遺構確認面・遺物包含層の上面から 30㎝以上の盛土）とし，この範囲は工事立会いでの対応，排水路工事に伴って遺跡部分の掘削が不可避な約 600㎡については本発掘調査を行うことで合意した。調査は，市教委が主体となり市職員が調査担当として直営で実施することとし，調査に係わる作業員や機材などを市の調査体制に組み込むものとした。

本発掘調査　以上を受け，平成 23 年度の本発掘調査実施のために平成 23 年 5 月 6 日付けで新潟県新発田地域振興局長と新発田市長との間で発掘調査費用負担契約を締結した。また，県振興局は文化財保護法第 94 条 2 項の「埋蔵文化財発掘の通知」を平成 23 年 5 月 26 日付け芝振農整第 194 号で新潟県教育長へ通知した。市教委は県教委へ発掘調査着手を平成 23 年 5 月 27 日付け文行第 84 号で報告し，6 月 2 日より調査に入った。

調査の結果，発掘箇所が集落の末端部分にあたっていることが判明し，当初の想定よりも検出された遺構は希薄で遺物量も少なかった。現地での作業は当初の予定より短縮し，7 月 20 日をもって終了した。また，本発掘調査と一部並行して行った遺跡の工事立会い（平成 23 年 6 月 29 日～ 10 月 5 日）において多量の遺物が出土し，

当初の計画よりも整理作業量が増加する見込みとなった。これを受けて，新発田市長は平成 24 年 1 月 5 日付け文行第 667 号で契約の変更を依頼し，県振興局長と同年 1 月 11 日付け芝振農整第 910 号で調査費用負担の変更契約を締結した。県振興局への発掘調査事業完了報告書は，平成 24 年 3 月 21 日付け文行第 830 号で提出した。また，平成 24 年度については，本格整理作業および発掘調査報告書作成のために平成 24 年 5 月 7 日付けで県振興局長と新発田市長との間で発掘調査費用負担契約を締結している。

2　調査体制・方法と経過

調査体制

平成 20 年度（範囲確認調査）

監　　理　大滝　昇　（教育長）
　　高澤誠太郎（教育部長）
総　　括　杉本　茂樹（生涯学習課長）
調査担当者　田中　耕作（　〃　参事）
調 査 員　渡邊美穂子（　〃　主任）
　　笹澤　正史（　〃　臨時職員）
事 務 局　渡邊美穂子（　〃　主任）
　　本田　祐二（　〃　文化財技師）

平成 23 ／ 24 年度（本発掘調査／報告書作成）

監　　理　塚野　純一（教育長）
　　新保　勇三（教育部長）
総　　括　荻野　正彦（生涯学習課長）
　　田中　耕作（　〃　文化行政室長）
調査担当者　鈴木　暁　（　〃　主任）
調 査 員　一箭　義貴（　〃　臨時職員）
　　井澤　　昇（　〃　　〃　，24 年度）
事 務 局　渡邊美穂子（　〃　主任）
　　本田　祐二（　〃　文化財技師）

方法と経過　本発掘調査は，ほ場整備事業によって失われる排水路部分についてのみ行った。調査区は総延長 252 m，東西幅 2.4 mと狭長なため，長軸を 10 mごとに分けて北側から 1 から 23 に分割した。また，調査区のセンターラインから西側をＡ区，東側をＢ区として大グリットを設定し，これを組み合わせて「１Ａ」のように呼称した。さらに大グリッド内を２mごとに区切って小グリッドを設定して北側から１から５とした。これを調査の基本単位とし，大小グリットの組み合わせから小グリッドを「４Ｂ３」のように呼称した。

６月２日～７日　0.4㎥級のバックホーを搬入して表土掘削を実施した。また，これと並行しつつ仮設ハウス・トイレを設置し，鉄板・発電機・ローリングタワーなどの資材および調査機材を搬入して現場事務所を設営した。また，人力掘削に先立ちセオドライトを用いて調査区の設定を行った。発掘調査は水路工事に伴うことから，調査区はほ場整備工事のメッシュに沿うものである。水路のセンターラインを示す工事用杭Ｓ７－１（Ｘ =220551.8735，Ｙ =76588.8651，第８系）を起点とし，同じくＳＳ７－２（Ｘ =220939.6500，Ｙ =76503.2505，同）を指標として調査区の南北ラインを設定し 10 mおきに木杭を打設した。また，これと直行する方向を南北軸として調査区の幅を片側 1.2 mずつ出していった。このため，グリッドの境界は調査区の中央を縦断する。なお，Ｓ７－１杭は調査区の 22A5/22B5/23A1/23B1 の交点にあたる。

６月８日～ 15 日　発掘調査は北半部（１～ 11 区）と南半部（12 ～ 23 区）に分割して実施することとし，北半部から着手した。３区から６区にかけて土坑および畝状の小溝，ピットなどが検出された。７・８区では調査区を横断する低い落ち込みがみられた。傾斜が緩く人為的な掘り込みとは言い難いことから，自然地形と判断した。個々の遺構を掘削して記録を作成したのち，北半部を完掘した。

６月 16 日～７月８日　南半部の調査に着手する。バックホーを搬入して表土掘削の後，遺構調査を開始した。梅雨時の長雨による入水が著しく作業が停滞する。借り上げた水中ポンプだけでは汲み上げが追い付かず，エンジンポンプを増加して排水作業を行った。調査の結果，21 区から 23 区にかけては部分的に遺物包含層が残存し

ており，平安時代の土師器･須恵器が多く出土した。また，この下面からは畝状小溝群が検出され調査を行った。

7月11日～20日　南半部調査区の南端で直交する22・23区の調査に取り掛かる。バックホーで表土を掘削したのち，遺構の精査を行う。23Ａ～Ｃ区で溝・土坑等の遺構を検出・掘削した後にレベリング等の記録作成，完掘写真撮影を実施し現地調査を終了した。引き続いて搬入した機材を撤収し，現場事務所を撤収した。

また，保護盛土範囲の工事立会いを現地調査中の6月29日から調査終了後の10月5日にかけて断続的に実施した。この工事立会いにおいて多量の遺物が回収された。表土中に含まれていた遺物が主体と考えられるが，全体的にみて質・量ともに豊富であり，もともとは下部に残存している遺構や遺物包含層が水田耕作などで撹乱を受けた結果浮揚してきた遺物だと考えられる。特に調査区南側では，狭い範囲からまとまって遺物が出土した箇所もみられた。確認調査の結果も併せて考えれば，本遺跡の主体部分には相当量の遺構・遺物が存在していると推察できる。

3　整理作業・層序

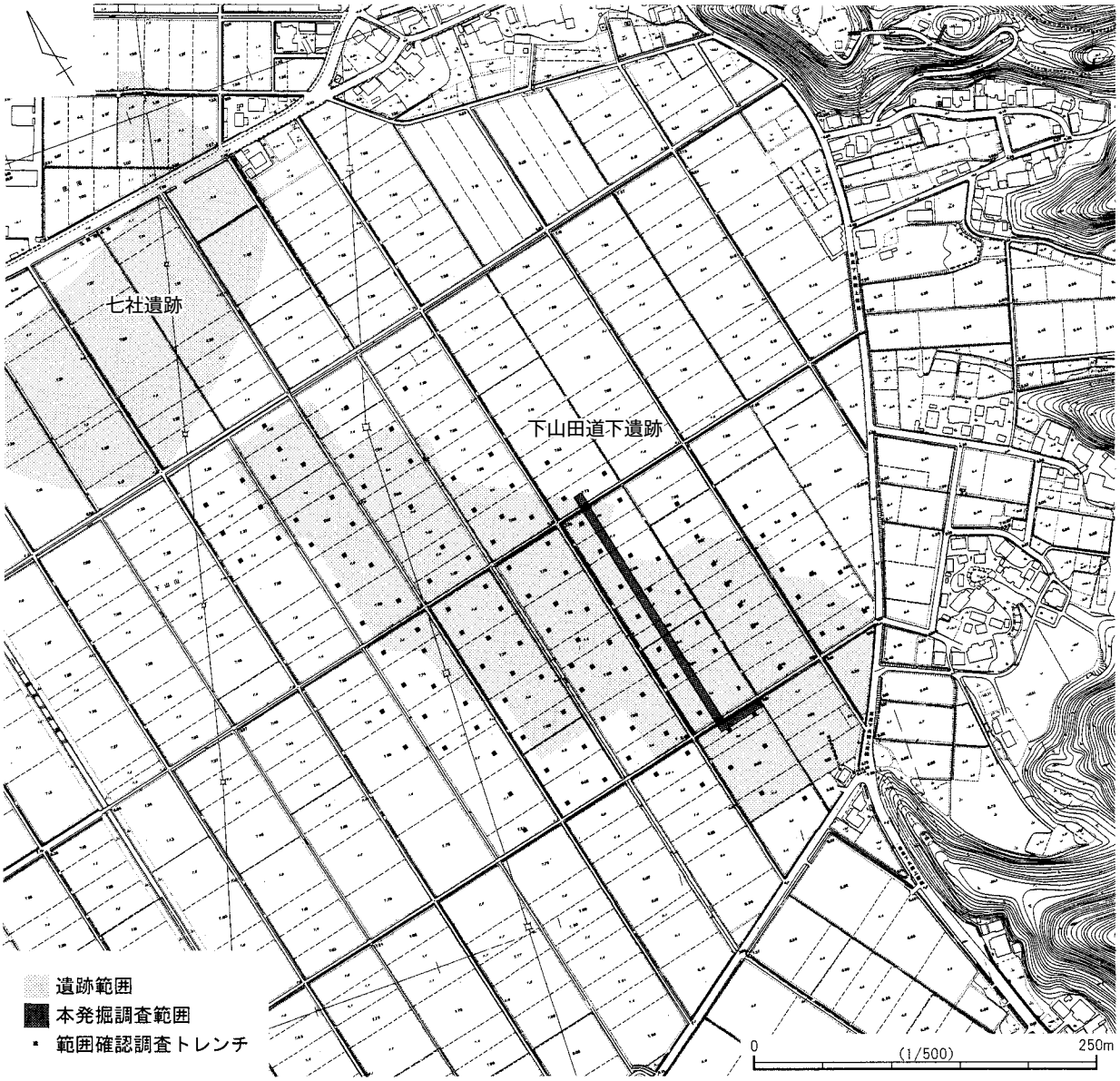
整理作業　現地調査の終了後，屋内整理作業に着手した。平成23年度は，出土遺物を水洗し出土位置や日付などを注記し完了した。これと並行して遺物の分類を行った。また，遺構図面類を整理し，平面図と断面図の整合確認を進めた。撮影した写真は，ネガをアルバムに整理し撮影情報を記入した。

平成24年度は，本格的な整理作業に着手した。遺構については図面の合成を進め報告書版下用の原図を作成し，遺物については接合作業の終了後，報告用遺物を選別して実測・撮影・観察表の作成を行った。併せて須恵器10点を，産地同定のための胎土分析を専門業者に委託して実施した。また，各図面のトレースを行って図版版下を作成し，原稿執筆の後に報告書を印刷・刊行した。

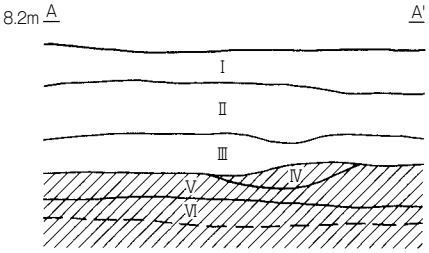
基本土層　平成20年度の確認調査結果から本遺跡の基本層序は，耕土･旧耕土･黒褐色粘質土またはガツボ層･古代遺物包含層・古墳時代遺物包含層・地山のシルト（粘土・砂）の順を基本とすることが判明した。ただし，旧地形が微高地であることから，ここに堆積していたであろう遺物包含層は，古代･古墳時代とも削平等によって欠失している場合が多く，残存している場所は旧微高地周辺の緩傾斜地にほぼ限られていた。遺物包含層の土質は，古代が灰色や灰オリーブ色のシルトを主体とする一方，古墳時代では灰色やオリーブ灰色の粘土が主体となっている。ただし，確認調査において両者が重なって検出したトレンチは極めて限定的であり，時代により遺跡の広がりは異なっていたと考えられる。また，遺物包含層下端の深度は，いずれのトレンチでも地表下60㎝以内であった。

本発掘調査においては22区Ｂ３の調査区東壁において基本土層を観察した（第３図）。

Ⅰ層は現表土で，水田耕作に供された暗褐色土である。Ⅱ層はオリーブ黒色土で，Ⅰ層に比べて粘性がやや強い。Ⅲ層との層理面はおおむね平坦であり，Ⅲ層上面で削平を受けた後に堆積した土層と考えられることから，旧表土に当たるものといえよう。Ⅲ層は粘性が弱くしまりの強い灰オリーブを呈するシルトで，平安時代の遺物包含層である。直径1mmから5mm程度の炭化物を少量含んでいる。この土層は，21区から23区にかけてのみ検出された。Ⅳ層以下は地山である。Ⅳ層は，灰色のシルトで部分的にのみ認められる。Ⅲ層に近似した層であるが，遺物を包含しないことから別の層と判断した。また，Ⅲ層に比べて，色調が若干暗めで炭化物がほとんど認められない。Ⅴ層は暗灰黄色の粘土である。この層の上面が遺構確認面となる。粘性が強くしまりはやや強い。調査区の全体において広く認められた。Ⅵ層は黄灰色粘土で，Ⅴ層よりもやや明るい色調である。また，調査区の他の箇所では部分的に砂層やシルト層を地山として確認しており，これらが互層となって堆積しているものと推察される。



第2図　調査区と確認調査トレンチの位置



22B-3 東壁

Ⅰ層　表土

Ⅱ層　オリーブ黒色土(7.5Y3/2)。

Ⅲ層　灰オリーブシルト(5Y4/2)。粘性弱くしまりやや強い。1～5mmの炭化物を少量含む。遺物包含層。

Ⅳ層　灰色シルト(5Y4/1)。粘性弱くしまり強い。1mmの炭化物を微量含む。地山。

Ⅴ層　暗灰黄色粘土(2.5Y4/2)。粘性強くしまりやや強い。地山。

Ⅵ層　黄灰色粘土(2.5Y4/1)。粘性強くしまりやや弱い。地山。

0　(1/20)　1m

第3図　基本土層

第Ⅲ章　遺　　構

1　遺構の概要

現地での発掘調査中は，検出した遺構を土坑・溝・ピット等に類別し，調査した順に１から番号を付した。調査終了後，検討を行い概ね北側から番号を振り直した。また，整理の過程で種別が変わったもの，欠番となったものが存在する。遺構の種別は平面・断面形状から判別した。今回の発掘調査で検出した遺構は，土坑５基，溝 28 条，ピット 10 基である。土坑は５号土坑を除きいずれも調査区外に延びるもので全体像は明らかにし得なかった。溝も同様に調査区外に広がるものが大半である。溝はいずれも幅狭で浅い小規模なもので，並行するものが近接してまとまりをもつことから，いわゆる畝状小溝と考えられる。分布の状況と溝の主軸方向が近似するものを群としてとらえ，４～６区の３号～７号溝をＡ群，17 区の 11 号～ 18 号溝をＢ群，21 ～ 23 区の 20 号～ 24 号，28 号溝のＣ群とした。ピットは，12 区で比較的まとまりをもつものの調査区が狭小なことから建物を認定することはできなかった。

2　遺構各説

1号土坑（第５・６･10・17 図）　3B4･5 に位置する。東側調査区外に広がるため全体像は不明だが，円形状の平面プランで深さ 25㎝強の浅い土坑である。炭化物や未分解質の植物遺体を含む２つの層からなり，底面には凹凸がみられる。土師器の椀・小甕 (1) のほかに斎串が４点出土した (196 ～ 199)。このうち，196 は逆位に突き刺さった状態で出土し（図版２），使用時の状態を示している可能性がある。

2号土坑（第５・６･17 図）　5B5, 6B1 に位置する。１号土坑同様に東半は調査区外へ続き詳細は不明である。30㎝の深さがあるが底面は不整形である。断面観察から 10 号溝に先行し４号溝・５号溝に後続する。土師器甕の小片のほか，両端を削って整形した棒状の木製品 (204) が出土している。

3号土坑（第７･10 図）　20A5 に位置する。調査区外にかかり全体像は不明だが，小形の土坑と考えられる。須恵器無台杯（2）のほか，須恵器甕，土師器椀・甕，黒色土器椀の破片が出土している。

4号土坑（第８図）　21A4･5 に位置する。方形プランの浅い土坑だが，西半分は調査区外に広がる。切り合い関係から 21 号溝に先行する。底部付近は未分解質植物遺体を多量に含む腐食土層が堆積しており，土師器無台椀，須恵器の甕・壺が出土しているがいずれも小片である。

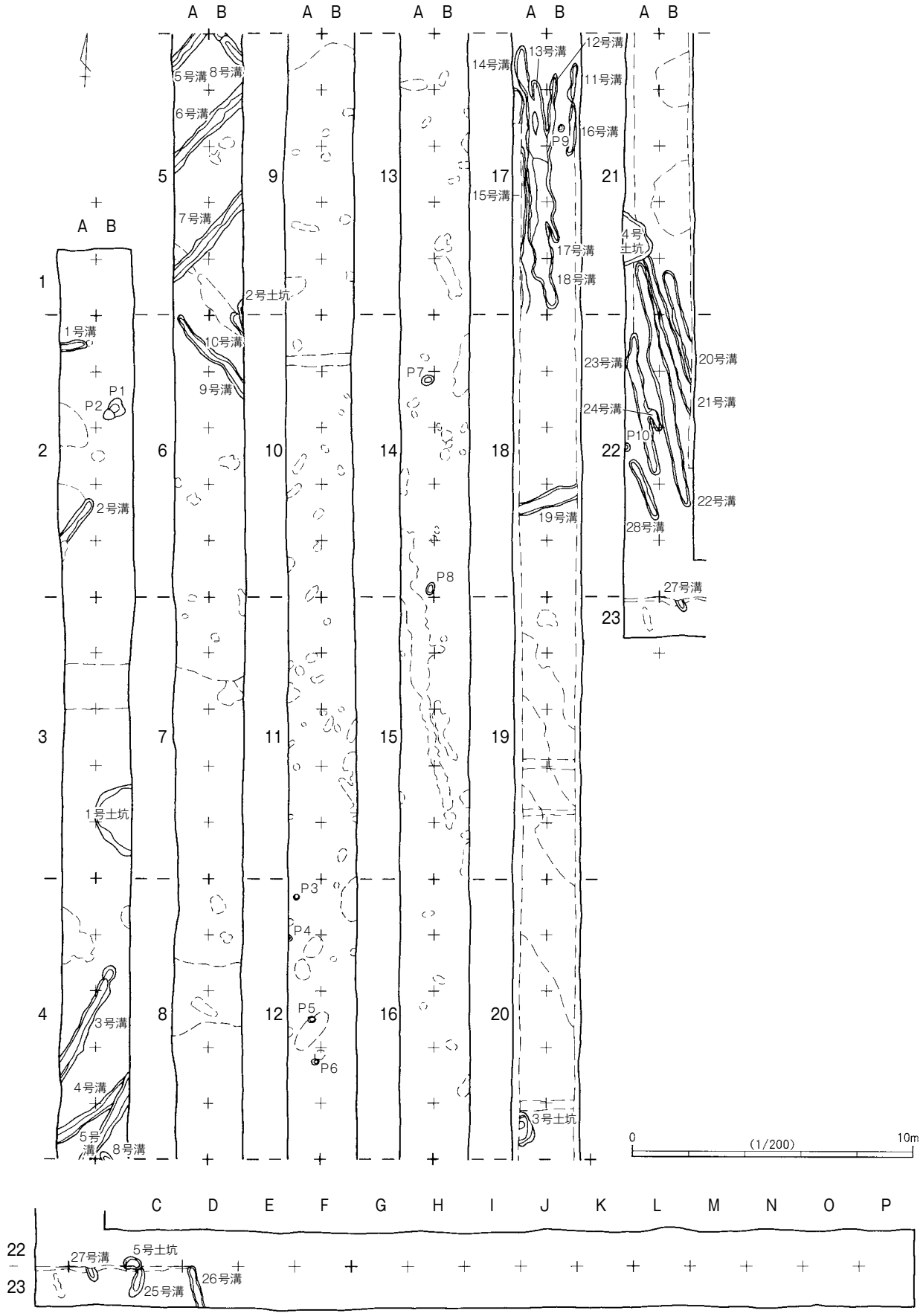
5号土坑（第８・10 図）　22C5 に位置する。浅い小形の土坑で，25 号溝を切っている。須恵器杯 (3・4) のほか土師器椀・甕，黒色土器Ａ類の小片が出土した。

1号溝（第５図）　2A1 に位置する。西側調査区外に延びるため詳細は不明だが，検出部位の規模から畝状小溝群を形成していたもの考えられる。須恵器杯が出土したが小片のため図化できなかった。

2号溝（第５図）　2A4･5 に位置する。西側調査区外に延びるため詳細は不明だが，規模および主軸方向が畝状小溝Ａ群と同様なことから，これに関連した遺構の可能性がある。

3号溝（第５・６・10 図）　3A･B2 ～４に位置し，溝Ａ群を構成する。土師器無台椀 (5) のほか，土師器甕，須恵器杯・蓋，黒色土器椀の小片が出土している。

4号溝（第５・６・10 図）　4A5，4B4･5 に位置する。溝Ａ群に対して主軸方向が異なり，５号溝に切られることから溝Ａ群に先行するといえる。土師器無台椀 (6)・甕，須恵器杯・甕の小片が出土した。


A B
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
1号溝
2号溝
3号溝
4号溝
5号溝
6号溝
7号溝
8号溝
9号溝
10号溝
11号溝
12号溝
13号溝
14号溝
15号溝
16号溝
17号溝
18号溝
19号溝
20号溝
21号溝
22号溝
23号溝
24号溝
25号溝
26号溝
27号溝
28号溝
1号土坑
2号土坑
3号土坑
4号土坑
5号土坑
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
0
(1/200)
10m
C D E F G H I J K L M N O P
22
23

第4図　遺構全体図

5号溝（第５・６図） 4A5，4B4・5，5A1 に位置し溝Ａ群を構成する。上幅 50㎝，深さ 20㎝程度の両側辺が並行する溝で，４号溝を切っている。

6号溝（第５・６·10 図） 5A2·3，5B1·2 に位置し溝Ａ群を構成する。埋土は，５・６号溝同様にオリーブ黒色シルトの単層である。須恵器杯 (7·8)・杯蓋，土師器椀・甕が出土した。

7号溝（第５・６図） 5A4·5，5B3·4 に位置し溝Ａ群を構成する。土師器椀・甕，何らかの部材であったと考えられる木片が出土しているが，小片のため図示していない。

8号溝（第５・６・10 図） 4B5·5B1 に位置する。幅や深度は周囲の溝Ａ群と共通するものの，主軸はこれらと直交方向を向く。長さが短いことから性格自体が異なるものかもしれない。須恵器無台杯 (9) 出土。

9号溝（第５・６図） 6A1·6B1·2 に位置する。溝Ａ群の直交方向に延びる。土師器椀・甕の小片が出土。

10 号溝（第５・６図） 6B1 に位置する。10 号土坑および撹乱に切られており全体像は不明であるが，残存部分から判断するに８・９号溝と同様に溝Ａ群と直交する溝と考えられる。

11 号溝（第７図） 17B1·2 に位置する。長さ 1.3 ｍと短く，南には 16 号溝が近接して存在することから一連の遺構の可能性がある。須恵器杯・土師器甕の小片が出土している。

12 号溝（第７図） 17B1 ～ 3 に位置し，溝Ｂ群を構成する浅い小規模な溝である。土師器椀・甕の小片が出土している。13 号溝と切り合いを持つが，埋土に差異は認められず，新旧関係は不明である。

13号溝(第７図） 17A1 ～ 4, 17B2 ～ 4 に位置する。溝Ｂ群の他溝と切り合うものの新旧関係は把握できなかった。須恵器杯，土師器椀・甕が出土した。

14 号溝（第７図） 17A1 ～ 4，17B3 ～ 5 に位置する。13・17・18 号溝と重複するが，埋土に違いは認められず新旧関係は不明である。土師器甕の小片が出土した。

15 号溝（第７図） 17A1 ～ 5 に位置する。浅い溝だが，西側は調査区壁にかかっており不明である。

16 号溝（第７図） 17B2·3 に位置する。11 号溝の南側に近接し，本来は一連の遺構と考えられる。

17 号溝（第７図） 17B4 に位置し，13・14 号溝の南側で接する。本来は個別の溝と考えられるが，埋土に差異は認められず，全体像や新旧関係は不明である。

18 号溝（第７図） 17A·B5 に位置する。17 号溝と同様に 13・14 号溝の南端に接しているものの新旧関係等は不明である。土師器甕の小片が出土した。

19 号溝（第７・17 図） 18A·B4 に位置し，単独の存在で AB 群と主軸が異なる。円盤状木製品 (206) 出土。

20 号溝（第８·10 図） 21B5，22B1·2 に位置する。須恵器杯 (10)，土師器椀 (11) のほか須恵器甕，土師器甕，黒色土器椀などが出土している。

21 号溝（第８図） 21A4·5，21B5，22B1·2 に位置する。４号土坑に切られている。須恵器甕，土師器椀·甕，黒色土器椀などが出土した。

22 号溝（第８·10 図） 21A5，22A1·2，22B1 ～ 4 に位置する。須恵器杯 (12·13)・甕，土師器甕・鍋，黒色土器椀が出土している。

23 号溝（第８図） 22A1 ～ 3 に位置する。24 号溝を切る。須恵器杯，土師器甕の小片が出土した。

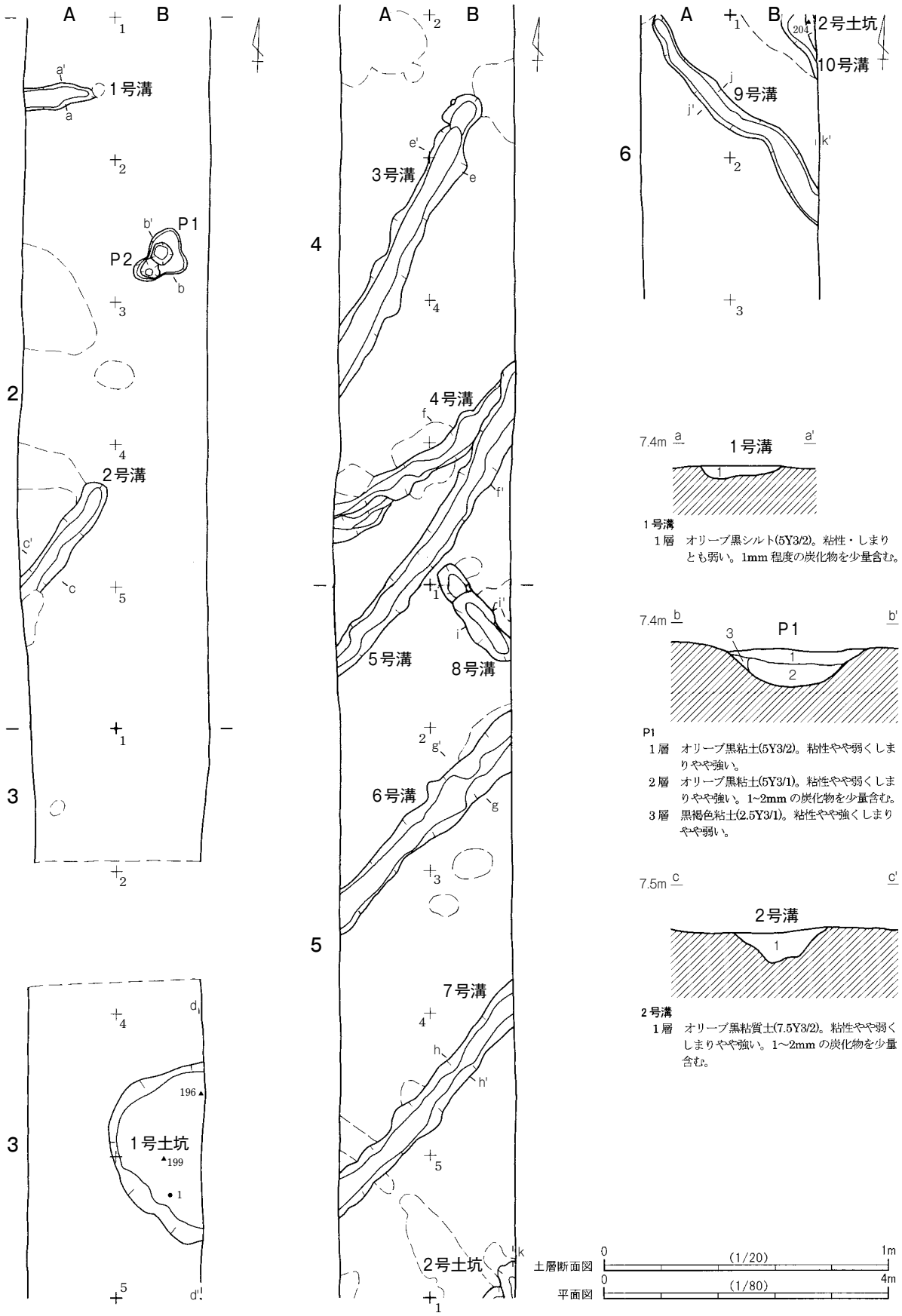
24 号溝（第８図） 22A·B2·3 に位置する。23 号溝に切られる。

25 号溝（第８·10 図） 23C1 に位置する。5 号土坑を切る。須恵器杯 (14)，土師器椀 (16)，黒色土器椀 (15·17) のほか須恵器壺，土師器甕・鍋，黒色土器鉢の小片が出土している。

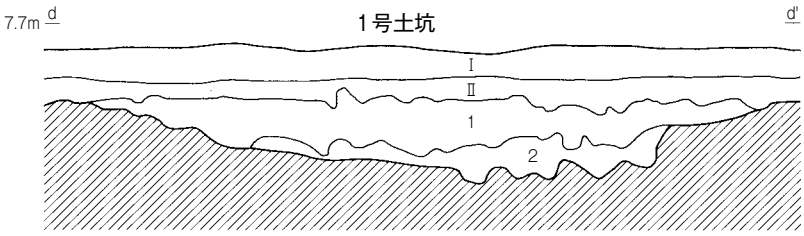
26 号溝（第８·10 図） 23D1 に位置する。須恵器杯 (19)，土師器椀 (20・18)・甕 (21) などが出土。

27 号溝（第８図） 23B1 に位置する。土師器甕の小片が出土した。

28 号溝（第８・10 図） 22A3·4 に位置する。須恵器杯 (23)，土師器甕 (22) が出土している。


A
B
1号溝
2号溝
P1
P2
3号溝
4号溝
5号溝
6号溝
7号溝
8号溝
9号溝
10号溝
1号土坑
2号土坑
204
196
199
7.4m
7.5m
1号溝
P1
2号溝
1層　オリーブ黒シルト(5Y3/2)。粘性・しまりとも弱い。1mm 程度の炭化物を少量含む。
1層　オリーブ黒粘土(5Y3/2)。粘性やや弱くしまりやや強い。
2層　オリーブ黒粘土(5Y3/1)。粘性やや弱くしまりやや強い。1~2mm の炭化物を少量含む。
3層　黒褐色粘土(2.5Y3/1)。粘性やや強くしまりやや弱い。
1層　オリーブ黒粘質土(7.5Y3/2)。粘性やや弱くしまりやや強い。1～2mm の炭化物を少量含む。
土層断面図
平面図
(1/20)
(1/80)
0
1m
4m

第5図　1～6区の遺構（1）



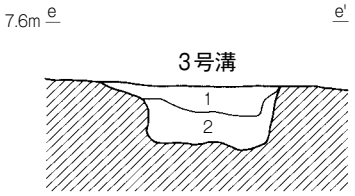
1号土坑

1層　オリーブ黒シルト(5Y3/2)。粘性やや強くしまりやや弱い。1～10mm の炭化物を少量含む。

2層　オリーブ黒砂質土(5Y3/1)。粘性・しまりともやや弱い。1～3mm の炭化物を微量、未分解質の植物遺体を少量含む。

Ⅰ層　極暗褐色土(7.5YR2/3)。耕土。

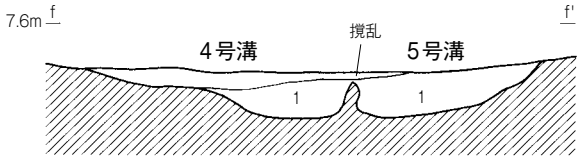
Ⅱ層　黒褐色土(5YR2/2)。5～10mm の1層のブロックを少量含む。



3号溝

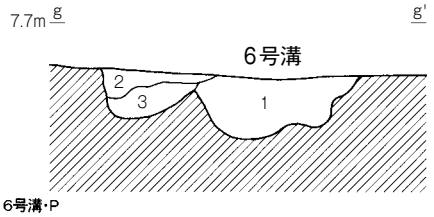
1層　黒褐色混砂土(7.5YR3/2)。粘性やや弱くしまりやや強い。1mm の炭化物を微量、5mm の細砂ブロックを少量含む。

2層　オリーブ黒粘質土(5Y3/1)。粘性やや強くしまりやや弱い。2～3mm の炭化物を微量含む。



4・5号溝

1層　オリーブ黒シルト(7.5Y3/2)。粘性・しまりともやや弱い。1～2mm の炭化物を微量、5mm ほどの地山シルトブロックを少量含む。

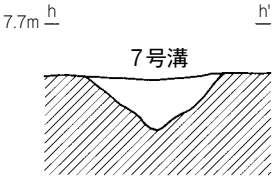


6号溝・P

1層　オリーブ黒シルト(7.5Y3/2)。粘性やや弱くしまり強い。3～10mm の炭化物を少量含む。

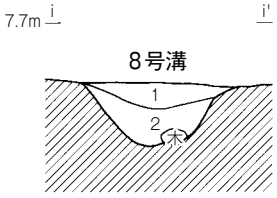
2層　オリーブ黒シルト(5Y3/2)。粘性弱くしまり強い。

3層　オリーブ黒シルト(5Y3/2)。粘性やや強くしまりやや強い



7号溝

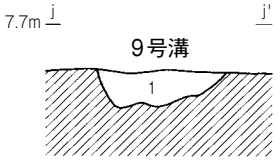
1層　オリーブ黒シルト(7.5Y3/1)。粘性やや弱くしまり強い。5～10mm の地山シルトブロックを多く含む。



8号溝

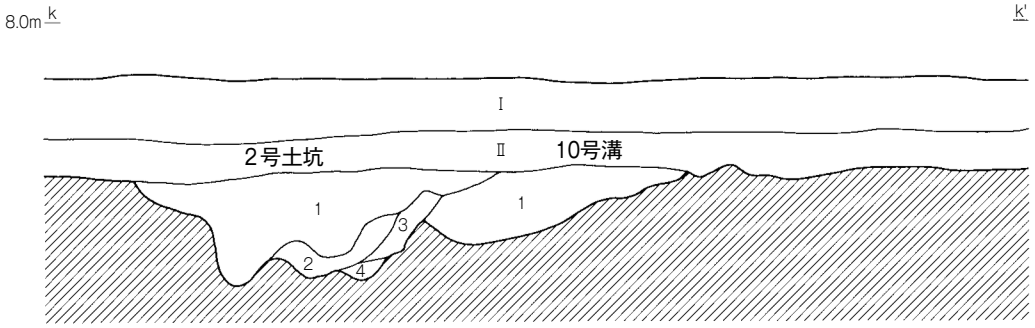
1層　オリーブ黒シルト(5Y3/2)。粘性弱くしまりやや強い。1～2mm の炭化物を微量含む。

2層　暗オリーブ灰シルト(2.5GY3/1)。粘性やや弱くしまりやや強い。



9号溝

1層　オリーブ黒シルト(7.5Y3/2)。粘性・しまりともやや強い。1mm ほどの炭化物を微量、5mm の地山シルトブロックを少量含む。



2号土坑

1層　オリーブ黒シルト(7.5Y3/2)。粘性弱くしまりやや強い。1~3mm の炭化物を微量、5~10mm の地山ブロックを多く含む。

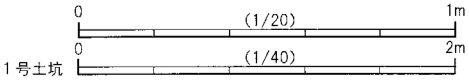
2層　灰オリーブ細砂(5Y5/2)。粘性弱くしまりやや弱い。1層をレンズ状に多く含む。

3層　灰オリーブ混砂シルト(5Y4/2)。2層と同質だがシルトをより多く含む。

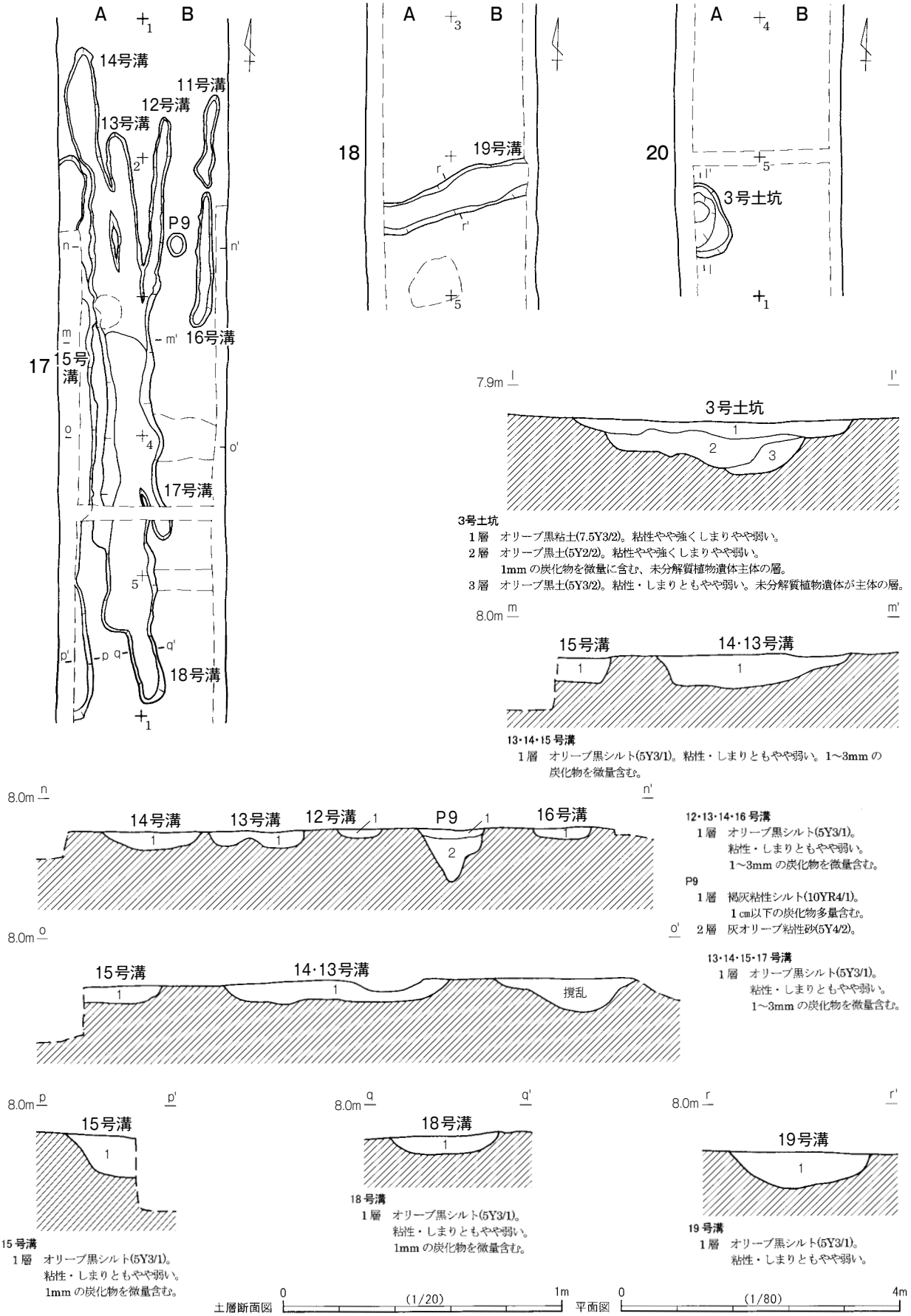
4層　オリーブ黒粘質土(5Y2/2)。粘性・しまりともやや弱い。未分解質の植物遺体を少量含む。

10号溝

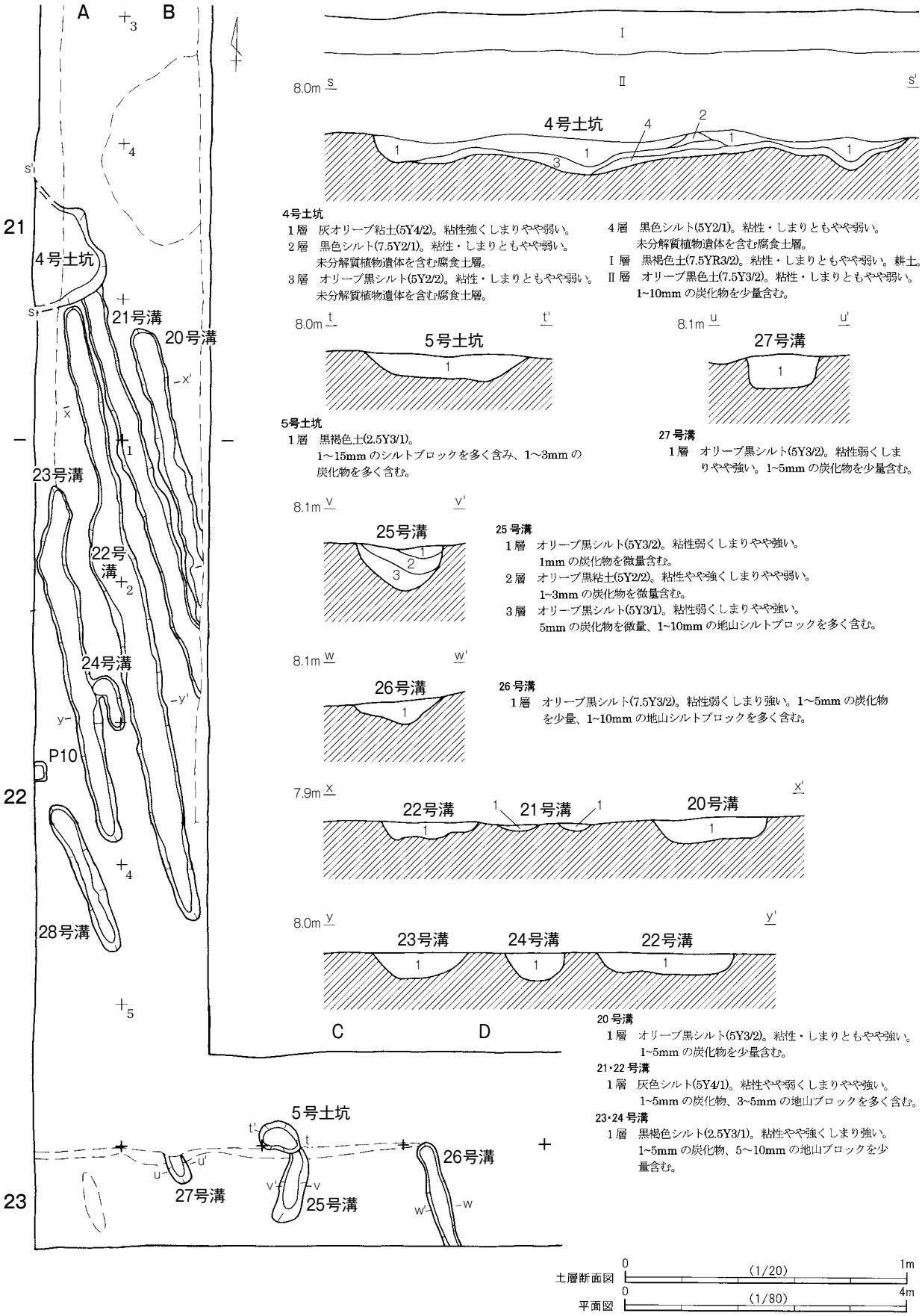
1層　オリーブ黒シルト(5Y3/2)。粘性やや弱くしまりやや強い。1~5mm の炭化物を少量、地山シルトを斑状に多く含む。



第6図　1～6区の遺構（2）



第7図　17 ～ 20区の遺構



4号土坑
1層　灰オリーブ粘土(5Y4/2)。粘性強くしまりやや弱い。
2層　黒色シルト(7.5Y2/1)。粘性・しまりともやや弱い。未分解質植物遺体を含む腐食土層。
3層　オリーブ黒シルト(5Y2/2)。粘性・しまりともやや弱い。未分解質植物遺体を含む腐食土層。
4層　黒色シルト(5Y2/1)。粘性・しまりともやや弱い。未分解質植物遺体を含む腐食土層。
Ⅰ層　黒褐色土(7.5YR3/2)。粘性・しまりともやや弱い。耕土。
Ⅱ層　オリーブ黒色土(7.5Y3/2)。粘性・しまりともやや弱い。1~10mm の炭化物を少量含む。

5号土坑
1層　黒褐色土(2.5Y3/1)。1～15mm のシルトブロックを多く含み、1～3mm の炭化物を多く含む。

27号溝
1層　オリーブ黒シルト(5Y3/2)。粘性弱くしまりやや強い。1~5mm の炭化物を少量含む。

25号溝
1層　オリーブ黒シルト(5Y3/2)。粘性弱くしまりやや強い。1mm の炭化物を微量含む。
2層　オリーブ黒粘土(5Y2/2)。粘性やや強くしまりやや弱い。1~3mm の炭化物を微量含む。
3層　オリーブ黒シルト(5Y3/1)。粘性弱くしまりやや強い。5mm の炭化物を微量、1~10mm の地山シルトブロックを多く含む。

26号溝
1層　オリーブ黒シルト(7.5Y3/2)。粘性弱くしまり強い。1～5mm の炭化物を少量、1~10mm の地山シルトブロックを多く含む。

20号溝
1層　オリーブ黒シルト(5Y3/2)。粘性・しまりともやや強い。1~5mm の炭化物を少量含む。

21・22号溝
1層　灰色シルト(5Y4/1)。粘性やや弱くしまりやや強い。1~5mm の炭化物、3~5mm の地山ブロックを多く含む。

23・24号溝
1層　黒褐色シルト(2.5Y3/1)。粘性やや強くしまり強い。1~5mm の炭化物、5～10mm の地山ブロックを少量含む。

第8図　21 ～ 23 区の遺構

表１　遺構観察表

（　）は残存値。遺構の新旧については（旧）＜（新）のとおり不等号記号で表した。

遺構名	グリッド	規　模（cm）			主軸方位	溝群	出　土　遺　物	重複・新旧関係	挿図	写真
		長軸	短軸	深さ						
１号土坑	3B4･5	(243)	(172)	28			土師器椀・小甕、斎串、板状木製品		5･6	2
２号土坑	5B5、6B1	(105)	(20)	29			土師器甕、斎串	＞10 号溝 ＜４・５号溝		
３号土坑	20A5	(108)	(58)	20			須恵器無台杯・甕、土師器椀・甕、 黒色土器椀、板状木製品		7	2
４号土坑	21A4･5	(175)	(115)	10			土師器無台椀・甕、須恵器甕・壺	＞21 号溝	8	
５号土坑	22C5	65	43	20			須恵器杯、土師器椀・甕、黒色土器椀	＞25 号溝		1･3
１号溝	2A1	(98)	34	14	N-80° -E		須恵器杯		5	
２号溝	2A4･5	(196)	38	28	N-33° -E		土師器甕			2
３号溝	3A2･3･4、3B2･3	(458)	55	20	N-24° -E	A	須恵器杯・蓋、土師器椀・甕、黒色土器椀		5･6	1･2
４号溝	4A5、4B4・5	(312)	43	19	N-59° -E	A	須恵器杯、土師器椀・甕	＜５号溝		
５号溝	4A5、4B4・5、5A1	(480)	31	14	N-29° -E	A		＞４号溝		
６号溝	5A2･3、5B1･2	(388)	63	16	N-42° -E	A	須恵器杯・蓋、土師器椀・甕			
７号溝	5A4･5、5B3･4	(413)	57	22	N-39° -E	A	土師器椀・甕、板状木製品			
８号溝	4B5、5B1	163	46	26	N-38° -W		須恵器無台杯			
９号溝	6A1、6B1･2	(375)	40	8	N-42° -W		土師器椀・甕			
10 号溝	6B1	(118)	(39)	6	N-32° -W			＜２号土坑		
11 号溝	17B1･2	132	26	8	N-2° -E	B	須恵器杯、土師器甕		7	3
12 号溝	17B1･2･3	(285)	24	9	N-4° -E	B	土師器椀・甕	13 号溝（新旧不明）		
13 号溝	17A1･2･3･4、 17B2･3･4	(370)	36	6	N-10° -W	B	須恵器杯、土師器椀・甕	12･14･17 号溝（新旧不明）		
14 号溝	17A1･2･3･4、 17B3･4･5	(450)	46	4	N-10° -W	B	土師器甕	13･17･18 号溝（新旧不明）		
15 号溝	17A1･2･3･4･5	809	(40)	11	N-3° -W	B				
16 号溝	17B2･3	195	24	6	N-2° -E	B			8	3
17 号溝	17B4	(110)	29	11	N-18° -W	B		13･14 号溝（新旧不明）		
18 号溝	17A5、17B5	(110)	40	8	N-15° -W	B	土師器甕	13･14 号溝（新旧不明）		
19 号溝	18A4、18B4	(261)	61	12	N-69° -E		曲物底板			
20 号溝	21B5、22B1･2	(495)	38	6	N-15° -W	C	須恵器杯・甕、土師器椀・甕、 黒色土器椀			
21 号溝	21A4･5、21B5、 22B1･2	(620)	44	5	N-18° -W	C	須恵器甕、土師器椀・甕、黒色土器椀、 黒色土器	＜４号土坑		
22 号溝	21A5、22A1･2、 22B1･2･3･4	890	65	9	N-13° -W	C	須恵器杯・甕、土師器椀・甕・鍋、 黒色土器椀、黒色土器有台椀			
23 号溝	22A1･2･3	513	48	11	N-14° -W	C	須恵器杯、土師器甕	＜24 号溝		
24 号溝	22A2･3、22B2･3	69	(35)	12	N-18° -W	C		＞23 号溝		
25 号溝	23C1	109	35	21	N-9° -E		須恵器杯・壺、土師器椀・甕・鍋、 黒色土器無台椀・鉢、黒色土器有台椀	＜５号土坑		
26 号溝	23D1	(155)	33	8	N-18° -W		須恵器有台杯、土師器無台椀・甕			1･3
27 号溝	23B1	(48)	28	13	N-22° -W		土師器甕			3
28 号溝	22A3･4	226	38	8	N-23° -W	C	須恵器無台杯、土師器甕			
ピット１	2B2	64	55	16				＜ピット２	5	
ピット２	2B2	(28)	(24)	19				＞ピット１		
ピット３	12A1	17	17	18					4	
ピット４	12A2	19	(16)	17						
ピット５	12A3	30	22	20						
ピット６	12A4	23	21	12						
ピット７	14A2	40	33	23						
ピット８	14A5	37	34	13						
ピット９	17B2	32	27	18					7	
ピット 10	22A3	28	(17)	10			須恵器坏・甕、土師器甕		8	

第Ⅳ章　遺　　物

1　出土遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は，少量の古墳時代の土師器および中世の陶磁器・古銭を除いてはすべて古代に属する。ただし，遺構出土遺物はわずかで遺構外出土の資料が大半を占める。だが，工事立会い時の出土遺物には一括性の高い遺物が含まれており，時期を比定する上において良好な資料となりうる。はじめに器種分類を提示し，分類に基づき遺構出土遺物，遺構外出土遺物の順で概要を記す。詳細は，遺物観察表を参照されたい。

2　器種分類

ここでは古代の土器についてのみ記載し，他の時代の遺物については個別記載で詳述する。

古代の土器には，土師器，須恵器，黒色土器，緑釉陶器がある。これらのうち，点数がまとまっている須恵器無台杯，土師器無台椀，黒色土器無台椀・有台椀については器形などから細分を行った。

土師器　器種は，無台椀，無台皿，有台皿，甕，鍋がある。

無台椀　器高指数（＝器高／口径×100）30未満の浅身をＡ類，器高指数30以上の深身をＢ類とし，さらに口縁部が内湾・外傾のものを１類，外反するものを２類とした。

無台皿　点数は少ない。いずれも底部は回転糸切りで，体部に強いロクロ目がみられる。

有台皿　全体のわかるものはない。高台はいずれも柱実の平高台で，ロクロ削り出しによるものである。

甕　鍋に比して出土量は少なく，全体像を把握できる資料に欠ける。口径13cm以下を小甕とした。

鍋　全体像のわかる資料はないが，口縁部は頸部で屈曲するもの，外側に開くものなどがある。

須恵器　器種は，無台杯，有台杯，折縁杯，杯蓋，甕，長頸瓶，短頸壺，横瓶，鉢がある。

なお，胎土は山三賀Ⅱ遺跡（坂井ほか1989）などで指摘されるとおり以下の傾向が認められる。

Ａ：相対的に粗く器面がざらつく。比較的大きな長石・石英・雲母などの砂粒を多く含む。

Ｂ：精良な素地で器面は滑らか。微細な長石を含み，黒色噴出物のみられるものが多い。

Ｃ：その他。精良な素地で器面は滑らかで，長石・石英等の砂粒が顕著でないものが多い。

無台杯　丸底をＡ類，平底をＢ類とし，椀形を呈するものをＣ類とした。

有台杯　比較的点数は少ない。深身で椀形に近いものが多い傾向がある。

折縁杯　椀形と皿型の器形が認められる。数量的には後者は少ない。

杯　蓋　つまみは，中央が山形に張り出すものとくぼむものがある。口縁部はまっすぐに垂下させるものと内側に折り返すものが存在する。

甕　全体のわかるものは少ない。大型のものには頸部に櫛描きの波状文を施すものが少なくない。

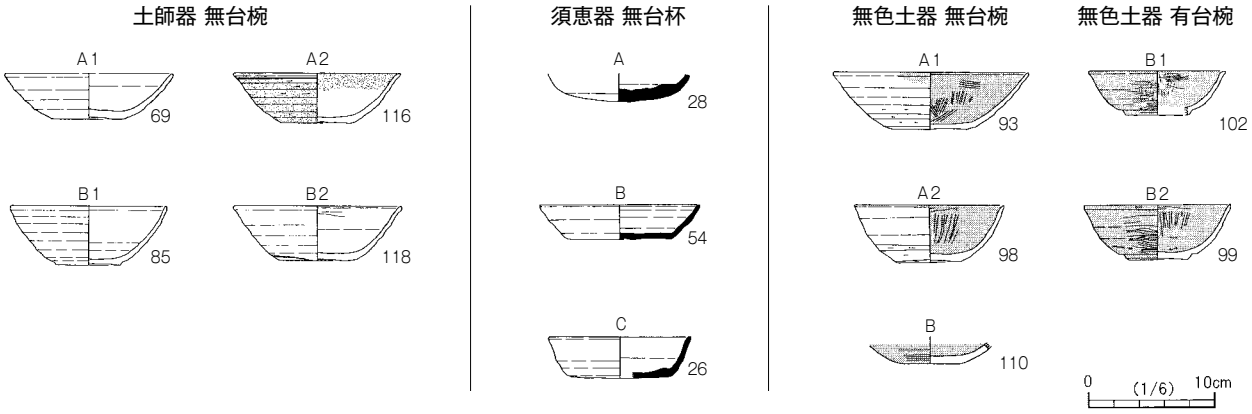
短頸壺　数は少なく，傾向は捉えがたい。

長頸瓶　数は少なく，傾向は捉えがたい。

横　瓶　タタキ成形によるものとロクロ成形のものがある。後者は薄手で胎土が精良である。

黒色土器　無台椀・有台椀・有台皿・無台鉢がある。それぞれ内面に黒色処理が施されたものをＡ類，内外の両面に黒色処理されたものをＢ類とした。

無台椀　器高指数30未満の浅身を１類，器高指数30以上の深身を２類とした。110を除いてはＡ類である。



第9図　土器分類図（椀・杯類）

有台椀　器高指数35未満を１類，器高指数35以上を２類とした。Ａ類はほとんど見られず，図化したものはすべてＢ類である。高台は削り出しの平高台が主体で，付高台は稀である。

有台皿　Ａ類は１点のみで付高台。Ｂ類は削り出しの平高台が多数で，付高台は109･154など少数である。

無台鉢　Ａ類のみ出土。椀よりも大型のものを鉢としたが，椀よりも体部の立ち上がりがやや急である。

緑釉陶器　椀の破片が１点のみ出土した。胎土は土師質で淡緑色の釉がわずかに残る。

３　遺構出土の遺物（第10図）

遺構は，畝状小溝と小規模な土坑が主体で遺物出土量は少なかった。遺物は大半が土器で，少量の木製品が伴うのみである。土器はどの遺構も小片が多く，器形や大きさを判断できる遺物を中心に図化した。

１号土坑（１･196～199）　１は土師器小甕で，内面には黒色の付着物が認められる。196～199は斎串で，196･199は板目，197･198は柾目の板材を用い末端側面を削り尖らせる。196は頭部を緩く山形に整形したとみられ，両側縁には上方からの２段の切れ込みがある。197～199は上部を欠損しており全体像は不明である。

２号土坑（204）　204は棒状木製品である。全面を面取りし横断面は六角形となる。上下両端を削って尖らせるが，裏面からの削りはなく片刃状の側面形を呈する。このほかには土師器椀・甕の小片が出土した。

３号土坑（２）　胎土Ｂの須恵器無台杯。ほかに土師器椀・鍋，須恵器甕，黒色土器Ｂ類椀の小片が出土。

５号土坑（３・４）　須恵器杯の口縁部片で，４は垂直気味に立ち上がったのち口縁がやや外反する。Ｃ類の無台杯または深身の有台杯か。このほかに土師器椀，須恵器杯，黒色土器Ａ類椀の小片が出土している。

３号溝（５）　土師器無台椀Ａ２類である。体部外面にはロクロ成形時の痕跡が強く残る。このほかに土師器椀・甕類，須恵器杯蓋，黒色土器Ａ類椀の小片が出土している。

４号溝（６）　Ａ１類の土師器無台椀である。ほかには土師器甕・鍋，須恵器無台杯の小片が出土した。

６号溝（７・８）　椀形の須恵器折縁杯で口縁は受け口状となる。ほかに土師器甕類，須恵器杯の小片が出土。

８号溝（９）　須恵器無台杯の底部で傾きが比較的急なことからＣ類とした。ほかに遺物の出土はなかった。

19号溝（206）　曲物の底板とみられる円盤状の木製品である。１／３程度の残存で直径は約９cmと小型である。柾目材を用い，表裏面ともに漆とみられる黒色付着物が部分的に観察される。土器類の出土はなかった。

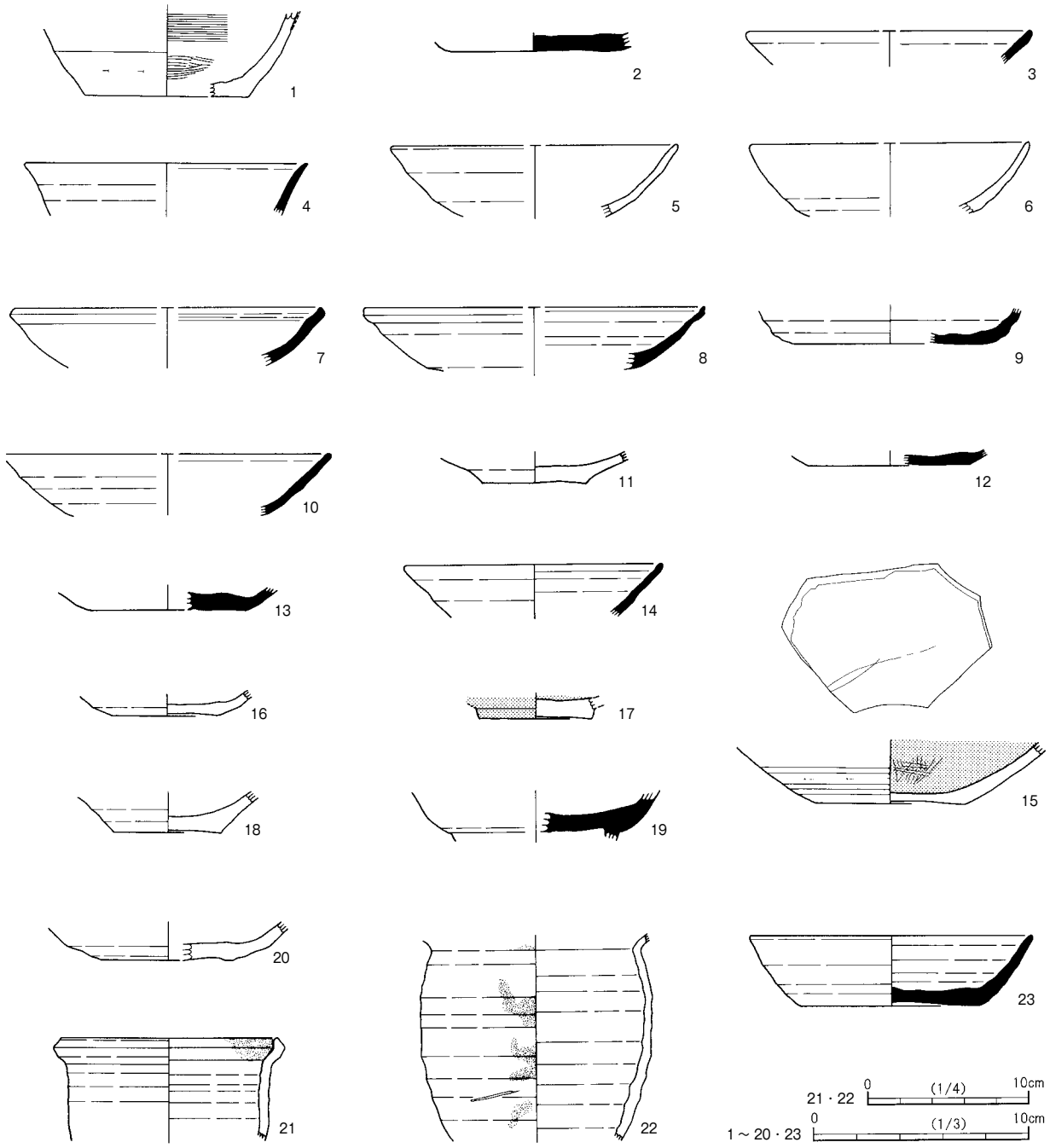
20号溝（10･11）　10は須恵器無台杯Ｂ類で口縁が大きく開く。11は土師器無台椀の底部片で，内面は弱く黒色化する。このほかに土師器椀・甕類，須恵器杯・甕の破片が出土している。

22号溝（12･13）　ともに須恵器無台杯である。13は焼きが甘いためか軟質である。このほかに土師器椀・甕・鍋，須恵器杯・甕，黒色土器椀Ａ類およびＢ類の有台椀の小片が出土した。

25 号溝（14 ～ 17） 14 は須恵器杯，16 は土師器無台椀，15 は黒色土器Ａ類の無台椀，17 が黒色土器Ｂ類の有台椀または皿である。14 は口縁が大きく外側に開く。15 は内底面に２条の弧線が弱く線刻されている。このほかに土師器椀・甕類，須恵器甕類，黒色土器Ａ類鉢の破片が出土した。

26 号溝（18 ～ 21） 18･20 は土師器無台椀で，18 は外反気味，20 は内湾気味に立ち上がる。19 は須恵器有台杯。21 は土師器小甕で口縁部内面に炭化物が帯状に付着する。このほか土師器椀・鍋の破片が出土している。

28 号溝（22・23） 22 はロクロ成形の土師器小甕で，外面に帯状の炭化物が付着している。23 はＢ類の須恵器無台杯で焼成は甘い。口縁部外面にうっすらと煤が付着し，黒ずむ。ほかに土師器椀の小片が出土している。



第 10 図　遺構出土土器

4　遺構外出土の遺物（第 11 図～ 17 図）

表土・遺物包含層の出土遺物（24 ～ 53）　Ⅰ・Ⅱ層の出土遺物は調査区全体で認められたが，遺構密度の薄い 11 ～ 20 区では少ない。また，Ⅲ層（遺物包含層）は 21 ～ 23 区のみで検出された。なお，黒色土器はＡ類の無台椀とＢ類の有台椀または有台皿が出土したが，小片のため図示し得なかった。

24 ～ 28 は須恵器無台杯である。24 の底部外面の墨書は「廿」ともとれるが，左側にわずかながら縦線が観察でき「世」の可能性もある。26 はＣ類，28 はＡ類とした。29 は須恵器有台杯。有台杯は遺跡全体を通じても多くない。30・31 は折縁杯で，30 は皿形，31 は椀形の体部である。30 は付高台の接合痕がそのまま残る。34 の杯蓋は，口縁部が外反し端部を折り返す。37 ～ 39・42 ～ 44 は甕。37 は焼きが甘く軟質で，胎土分析から五頭産の可能性がある。42 はケズリの痕跡が顕著で，底面には織物状の圧痕も認められる。43・44 は同一個体と思われる。なで肩で口縁部断面は「く」の字状となる。45 はタタキ成形の横瓶胴部。46 は丸底に高台が付される。甕または壺の可能性もあるが，底面が強く湾曲することから有台鉢の底部とした。

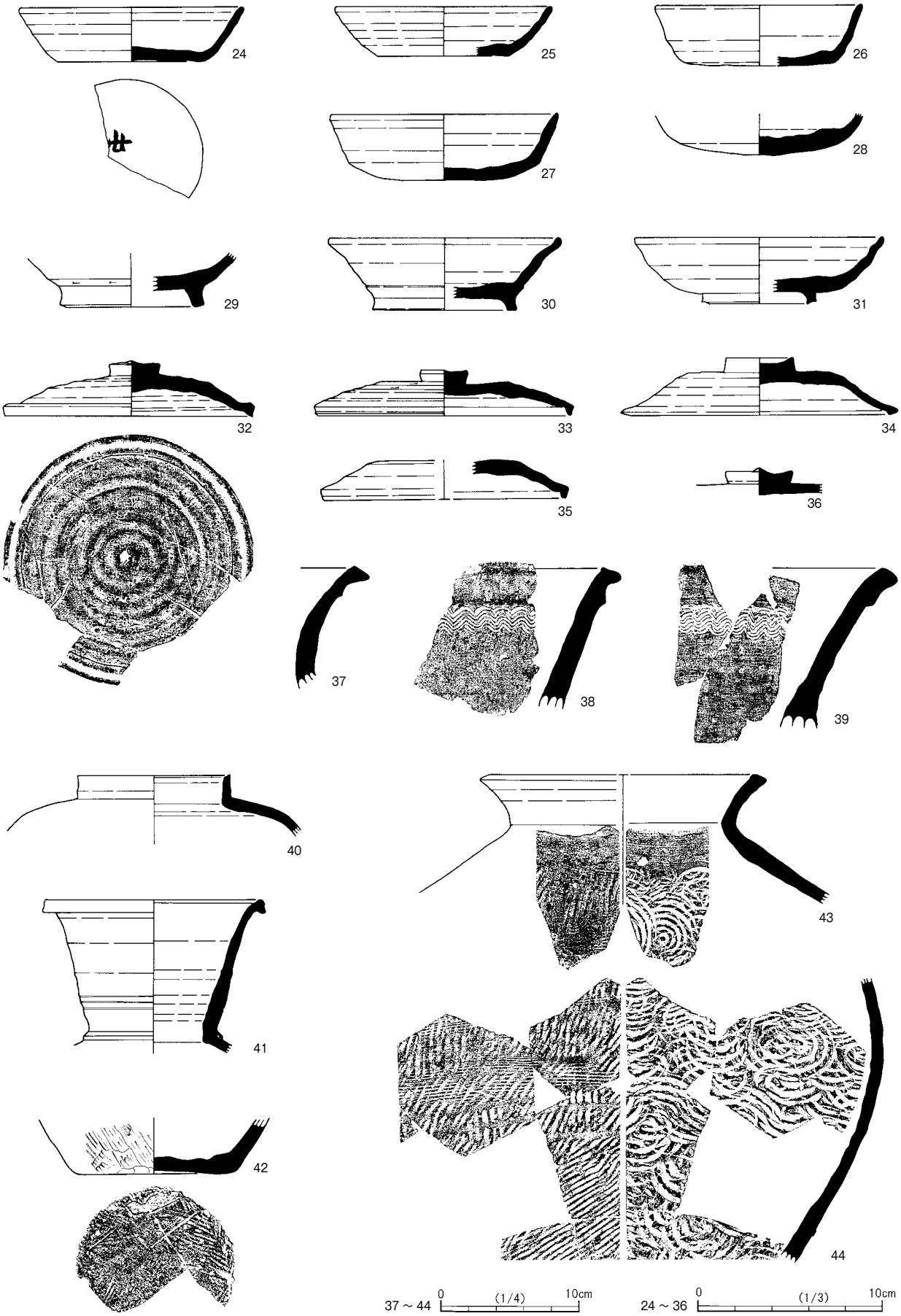
47 ～ 53 は土師器。47 ～ 51 は鍋で，48 が口縁部下で強く屈曲するほかは，体部が外傾または緩く内湾する。52・53 はいずれも 23 Ｂ１のⅢ層からの出土で器種は不明である。内面にタガ状の突帯が，外面には高台が付く。内面の突帯を横方向に同心円状に廻るとみた場合，外面の貼り付けは耳状の突起ともみられるが，53 の高台内側が平坦に近いため土器の底部とした。また，内底面には被熱による黒色化が認められる。

工事立会い遺物（54 ～ 168・182）　前述のとおり遺跡全域で立会いを実施した。多くは盛土施工に伴う踏査だが既存農道や水路の撤去でも遺物を得た。調査区南側では土器がまとまって確認され，これらを中心に図化した。

54 ～ 115 は，調査区南西側 20 m付近でまとまって見つかった土器である（南集中資料）。２m × ４mほどの範囲の，標高 7.6 m前後に分布する炭化物や未分解質植物遺体を少量含むオリーブ黒色土から出土した。周囲の地山より若干下がったレベルで検出されたことから，本来は遺構等に係る遺物と考えられる。確認調査結果と照らし合わせると，この箇所を通るラインには南東－北西方向に蛇行する落ち込みが 400 mほどにわたり存在すると推測され，自然流路の可能性が高い。また，116 ～ 127 は調査区南端から約 40 m南に位置する工事用杭「Ｚ27」杭付近の遺物である。遺存度の高い土器が狭い範囲にまとまってあり，もとは一括性の高い遺物かもしれない。

54 ～ 56 は須恵器無台杯Ｂ類である。54・55 は底面に墨書がみられ，54 の墨書はサイコロの四の目状に点を「::」と配したもので，同様の墨書は土師器・黒色土器にもみられる。55 は２点を直線で結び，さらに井桁状に２本の直線を加えている。胎土分析から 54・56 が小泊産，55 は小泊産の可能性が高いと指摘される。58 ～ 83・85 は土師器無台椀。59・69・74・83 はＡ１類，58・66 がＢ２類だがそれ以外はすべてＢ１類で，やや深みのあるボウル状の器形が多い。58 ～ 60 は底面に 54 同様「::」の墨書がある。また，59 は体部外面に漆とみられる褐色の顔料で「人」字が書かれる。68 は体部外面に「×」字状の浅い線刻がある。84 は土師器無台皿で外面に墨書がみられる。74・80 は内外面の口縁付近に炭化物が付着し，灯明に用いられたと思われる。

87 ～ 113 は黒色土器で，87 ～ 95・98 はＡ類無台椀，96・97 はＡ類無台鉢，99 ～ 104 はＢ類有台椀，110 はＢ類無台椀，109・111 ～ 113 はＢ類有台皿である。105 ～ 108 は底部を欠損し詳細は不明だが，器形からみて有台椀の可能性が高い。88 は底面に「::」の墨書がみられる。90 は体部外面に細い３条の直線で「＊」状の線刻が行われている。Ａ類の外面および底面はロクロケズリが顕著でミガキのあるものも存在する。内面はいずれも丁寧なミガキが観察できる。Ｂ類では全点に丁寧なミガキが認められる。114 は須恵器大甕，115 は須恵器横瓶である。115 は外面にロクロケズリ，内面にはカキメがみられる。体部との接合痕は消されずに残る。薄手の精良な胎土で阿賀北産須恵器には見られない特徴を有している。なお，胎土分析の結果からは頸城産の可能性が指摘される。



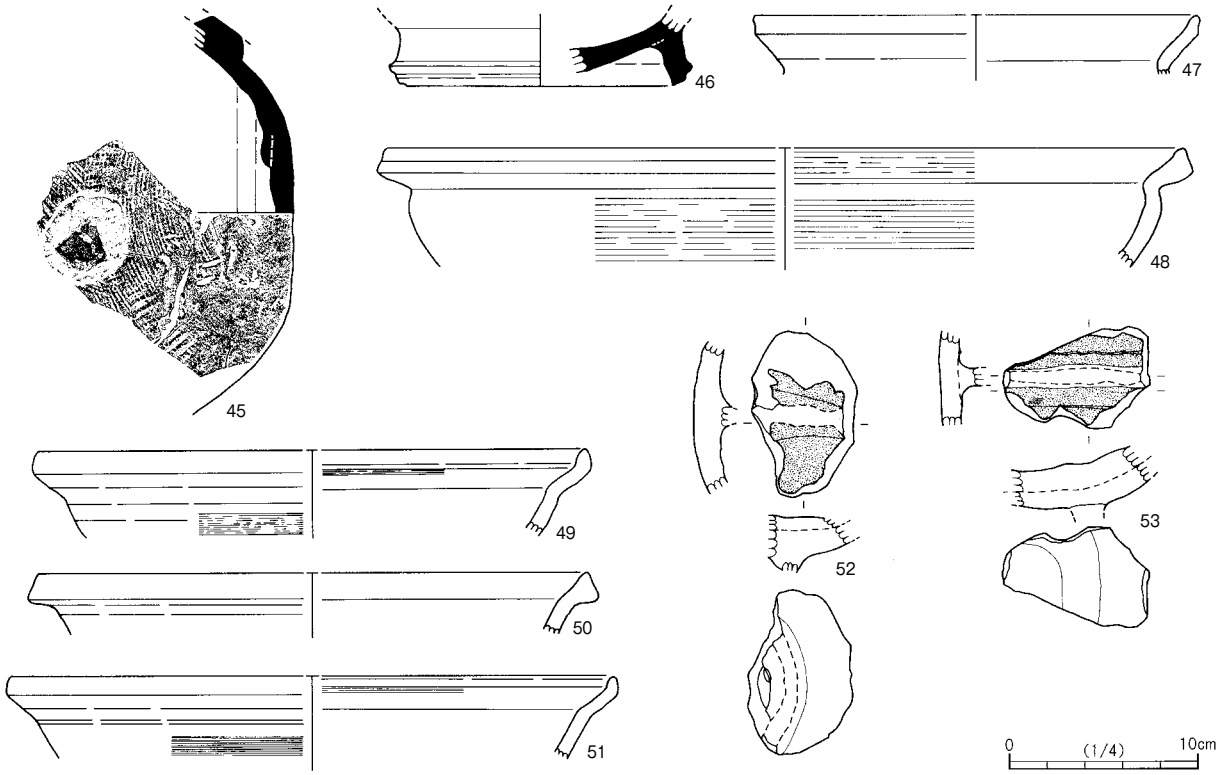
第 11 図　遺構外出土土器（1）

116 ～ 122・124・127 は土師器無台椀，125 は土師器無台皿，126 は土師器小甕の底部である。120 ～ 122・124 は墨痕がみられるが，断片的な資料であり詳細は不明である。123 の底面には２条の線刻がみられる。

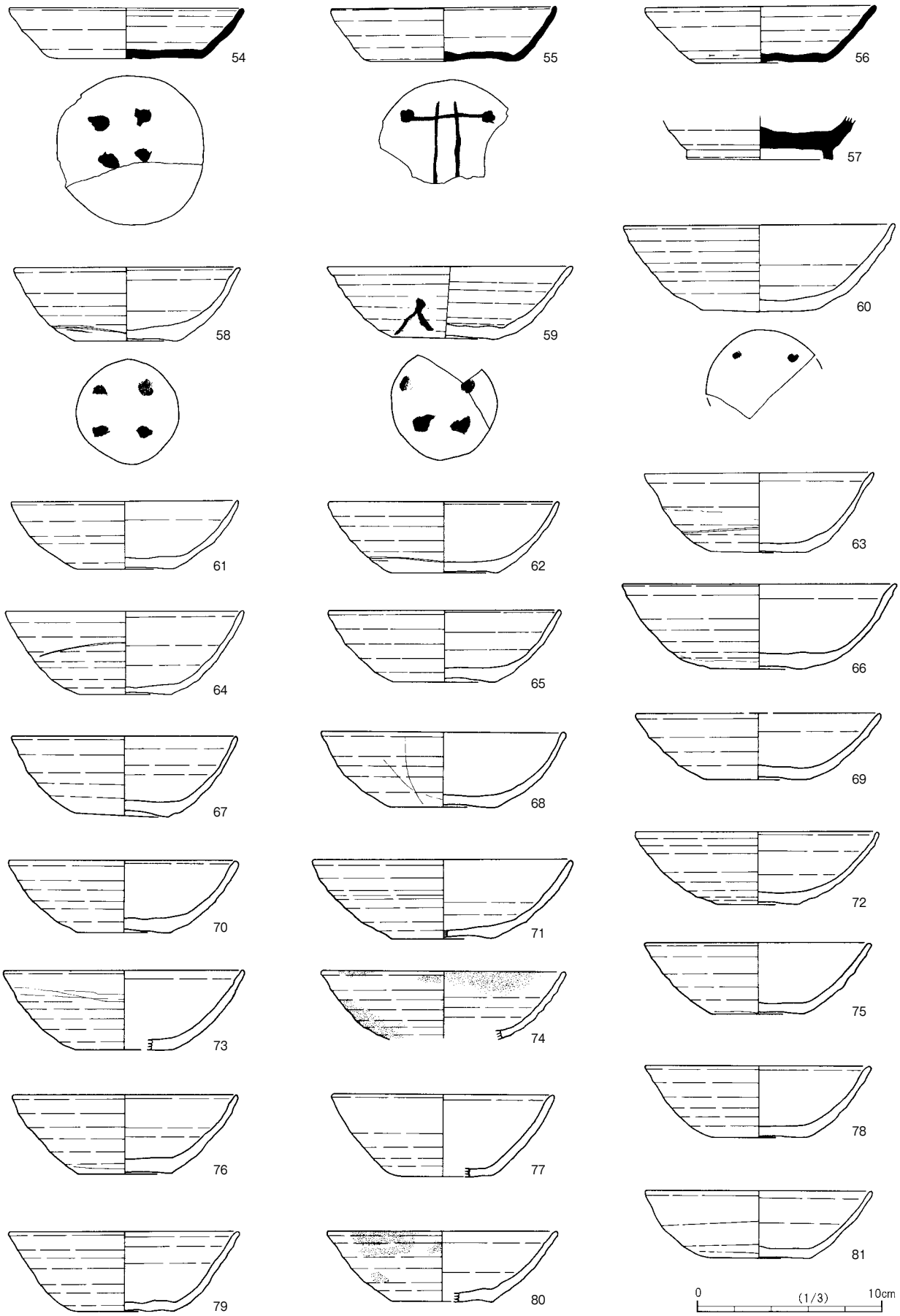
128 ～ 167 は，その他の工事立会い出土遺物である。128 ～ 141・157 ～ 162･166 は須恵器で，無台杯・有台杯・杯蓋・甕・壺・横瓶がある。142 ～ 149・164・165 は土師器で，無台椀・有台皿・甕・小甕がある。150 ～ 156・167 は黒色土器で，Ａ類の無台椀・無台鉢・有台皿，Ｂ類の有台皿を図示した。144 は体部外面に「カ」が逆位に, 145 は底面に「大」が墨書される。このほか墨書のある土器を中心に図化したが, 断片的で詳細は不明である。156 の黒色土器Ａ類無台椀は，内底面には暗文が観察できる。

166 は，内面に黒および赤色の漆が付着し，パレットの可能性がある。167 は内面に漆が固着し上面に漆紙が付着する。赤外線撮影では文字等は確認できなかった。ほかにも漆の付着した須恵器甕や無台杯の小片が見つかっている。168 は緑釉陶器椀で，内面に淡緑色の釉がわずかに残る。黄色味がかる土師質の素地で，洛北産か。182 は黒色粘板岩製の石帯丸鞆で，１対２箇所の潜り穴を有し全体的にやや横長である。表面・側面はよく研磨されるが，裏面にはノコギリ目が明瞭に残されている。 203・205 は箸状木製品でいずれも折損している。200 ～ 202 は端部が炭化した点け木で，炭化部分をトーンで示した。200・201 はⅡ層からの出土である。

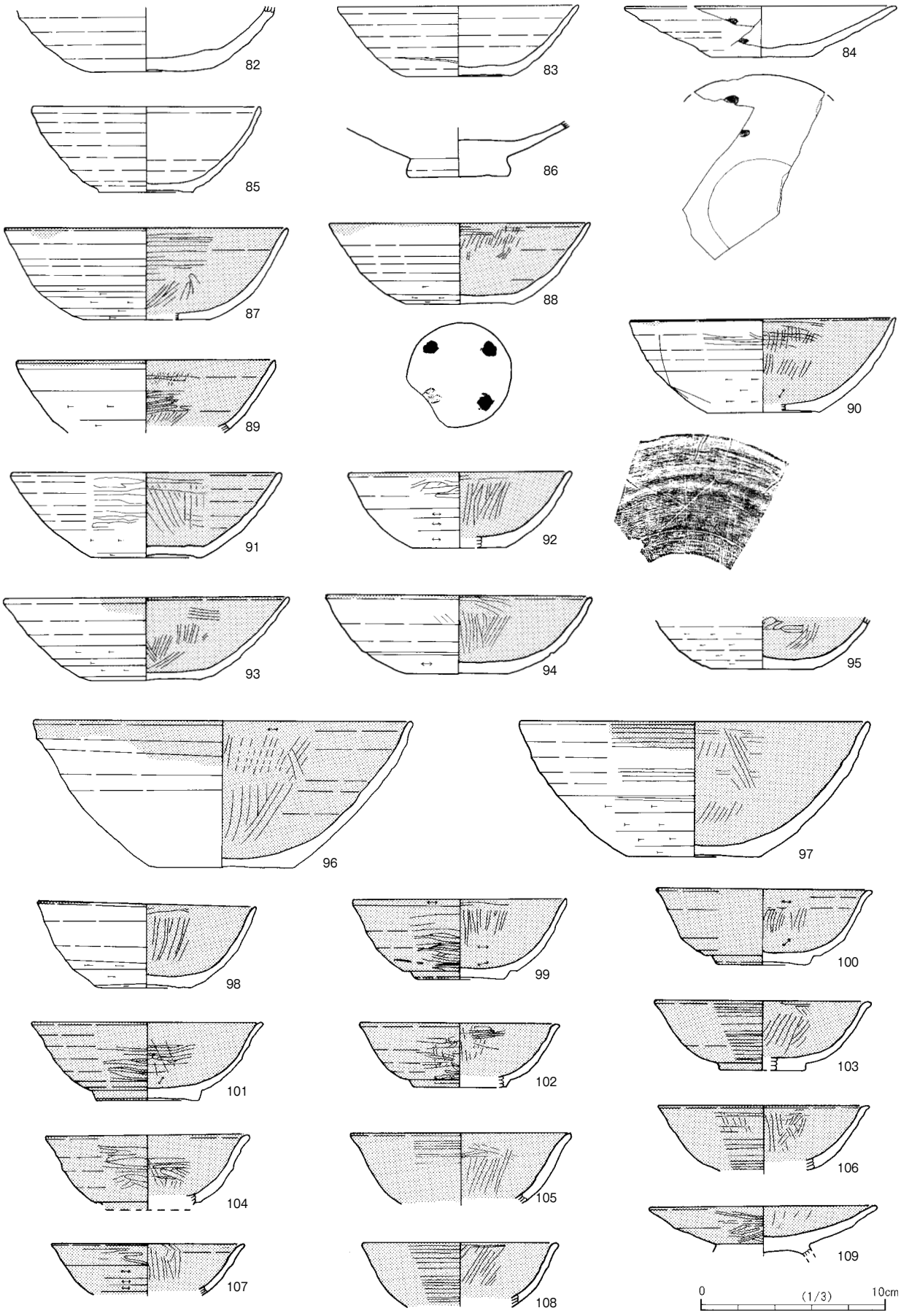
古代以外の遺物（169 ～ 181・183 ～ 195） 古墳時代と中世の遺物が少量ながら出土した。169 ～ 177 は古墳時代の土師器甕・壺・器台で，いずれも確認調査時の出土である。このうち 169 ～ 173 はトレンチ内で検出した土坑出土の一括資料である。胴の張らない「く」の字状口縁の甕, 小形器台を組成する。新潟シンポ編年の９期（滝沢 2005）相当か。178 ～ 180 は中世の陶磁器で，178 は白磁で碗の体部片と考えられる。上端には花文状の浮彫りが認められる。179 は確認調査トレンチ出土の鎬連弁文の青磁碗である。180 は瀬戸美濃の端反皿で，大窯１段階と思われる。181 は環状石製品である。両面穿孔で全面をよく研磨している。採集資料であり用途・帰属時期ともに不明。183 ～ 195 は北宋銭が主体で，工事立会い時の出土のため性格は不明である。



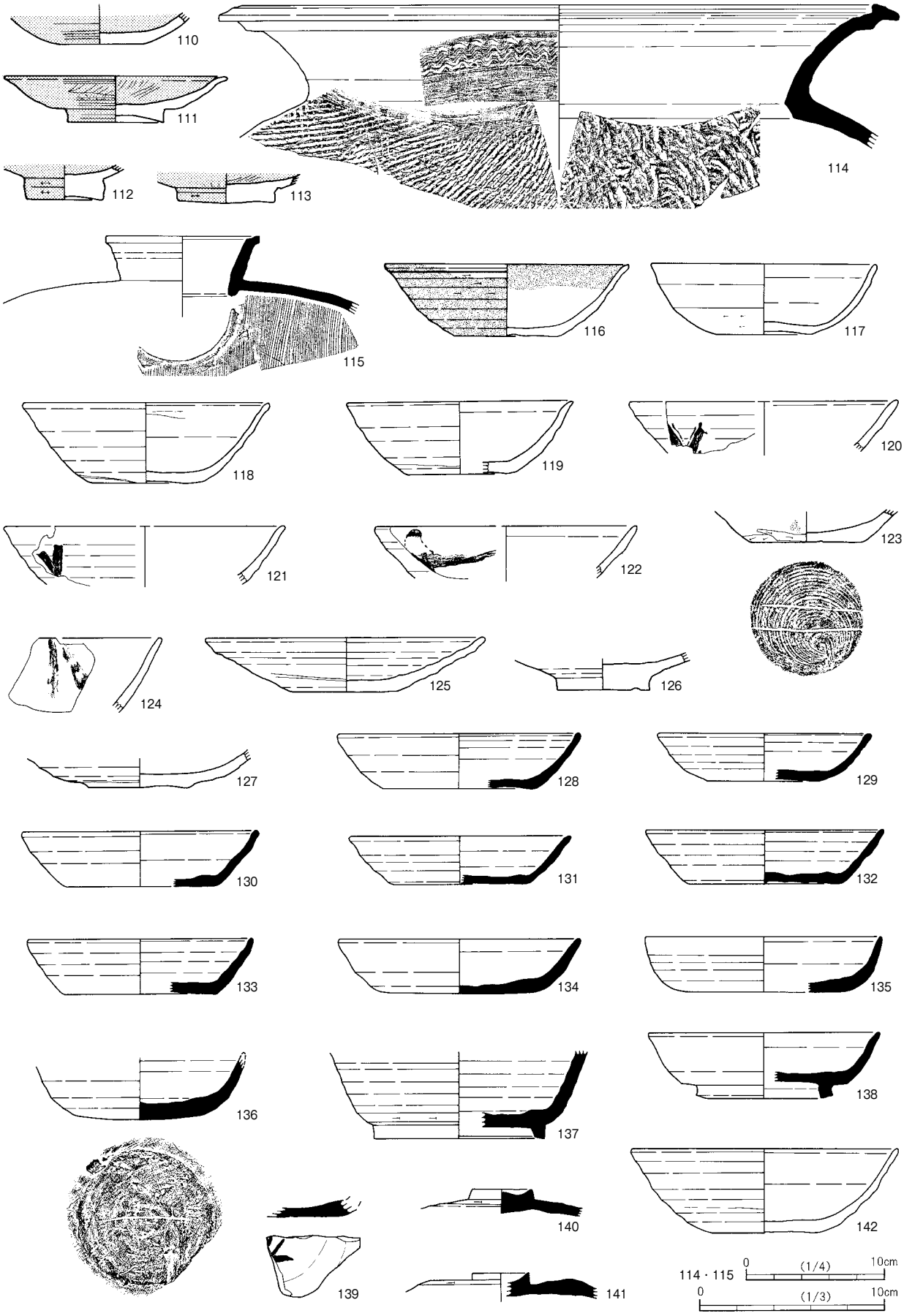
第 12 図　遺構外出土土器（2）



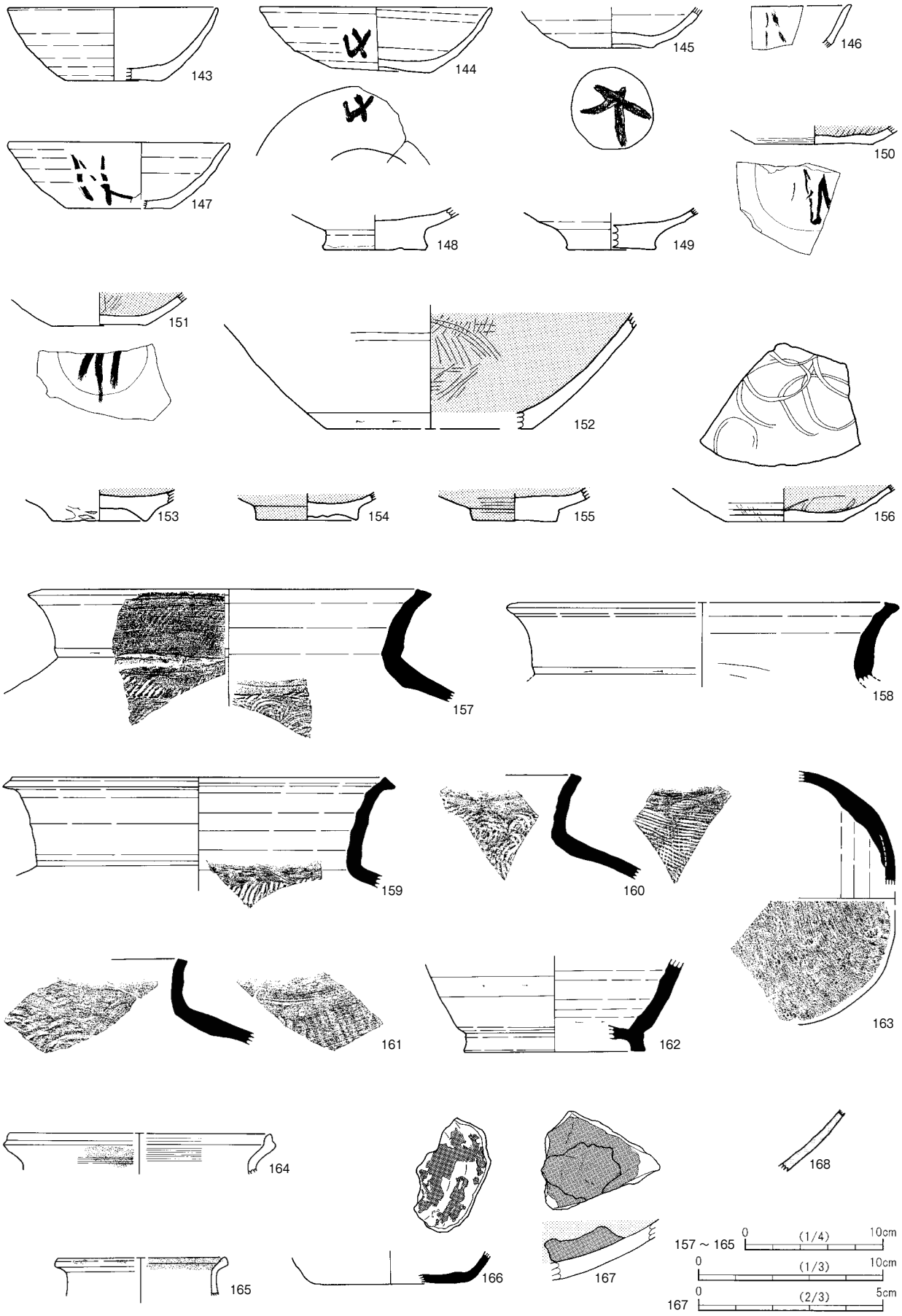
第 13 図　遺構外出土土器（3）



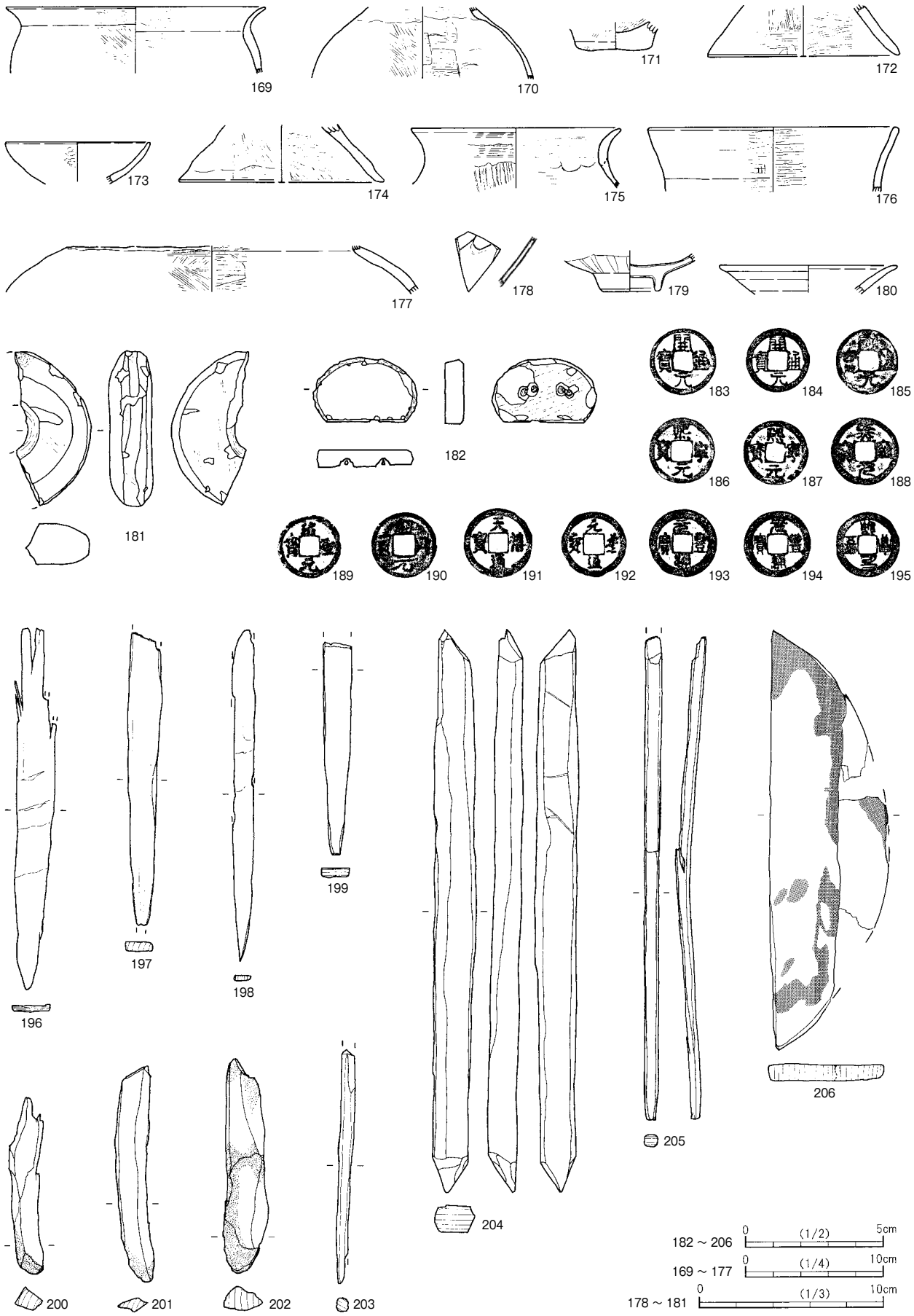
第 14 図　遺構外出土土器（4）



第15図　遺構外出土土器（5）



第16図　遺構外出土土器（6）



第 17 図　遺構外出土土器（7）・その他の遺物

表2　遺物観察表

※胎土の略称：長＝長石，石＝石英，赤＝赤色粒，雲＝雲母，骨＝海綿骨針

No.	遺構	調査地・層位	種別	器種	分類		計測値 (cm) 口径	器高	底径(摘径)	遺存度	器口指数	成形・調整	色調	胎土	備考	挿図	写真図版
1	1号土坑	3B5　1	土師器	甕			-	-	10.2	1.3	-	外：ナデ・ロクロケズリ→ナデ，内：カキメ・ナデ・ハケメ	10YR7/3 にぶい黄橙	2mm以下の長・石多，微細雲多	焼成普通，内面黒色付着物有	10	4
2	3号土坑	20A5　1	須恵器	無台杯	B		-	-	-	-	-	ヘラキリ，内：ロクロ	7.5Y6/1 灰	シルト質，1mm以下の長多	焼成良好（やや軟質），内面擦れ		
3	5号土坑	22C5　1	須恵器	杯			13.0	-	-	1.8	-	ロクロ	5Y6/1 灰	シルト質，精良，1mm以下の長，黒色噴出物微	焼成良好		
4	5号土坑	22C5　1	須恵器	杯			13.0	-	-	1.12	-	ロクロ	5Y6/1 灰	精良	焼成良好		
5	3号溝	4B3　1	土師器	無台椀	A	2	13.2	3.6	-	1.8	27.3	ロクロ	7.5YR7/3 にぶい橙	精良，微細雲微，2mm以下の長微	焼成普通		
6	4号溝	4B5　1	土師器	無台椀	A	1	12.8	3.3	-	1.12	25.8	ロクロ	10YR7/3 にぶい黄橙	精良，微細雲微	焼成良好		
7	6号溝	5A3　1	須恵器	折縁杯	A		14.2	-	-	1.8	-	ロクロ	5Y6/1 灰	3mm以下の長・石多	焼成良好		
8	6号溝	5B2　1	須恵器	折縁杯	A		15.7	-	-	1.8	-	ロクロ	N6/0 灰	4mm以下の長・石多	焼成良好		
9	8号溝	5B1　1	須恵器	無台杯	B		-	-	10.0	1.6	-	ロクロ，ナデ	2.5Y6/1 黄灰	シルト質，1mm以下の長多	焼成良好		
10	20号溝	22B1　1	須恵器	無台杯	B	1	15.0	-	-	1.12	-	ロクロ	5Y6/1 灰	シルト質，精良，1mm以下の長多	焼成良好（やや軟質）		
11	20号溝	22B1　1	土師器	無台椀			-	-	4.8	-	-	回転糸切り（右）	10YR8/2 灰白	1mm以下の長・石，2～5mmの長・石，微細雲	焼成普通，内面劣化顕著，内面弱く黒色化		
12	22号溝	21A5　1	須恵器	無台杯	B		-	-	7.4	1.4	-	ヘラキリ	5Y6/1 灰	シルト質，精良	焼成良好（やや軟質），内底面擦れ（うっすら墨付着）		
13	22号溝	22B2　1	須恵器	無台杯	B		-	-	7.4	3.8	-	ヘラキリ，内：ロクロ	2.5Y8/1 灰白	シルト質，2mm以下の長・石	焼成瓦質		
14	25号溝	23C1　1	須恵器	無台杯		1	11.8	-	-	1.6	-	ロクロ	5Y6/2 灰	シルト質，1mm以下の長	焼成良好（やや軟質）		
15	25号溝	23C1　1	黒色土器	無台椀	A		-	-	6.8	1.3	-	外：ロクロケズリ→ロクロミガキ，内：ミガキ	7.5YR7/3 にぶい橙	精良，1mm以下の赤色土粒多，微細雲	焼成良好，内底面擦れ・線刻?有		
16	25号溝	23C1　1	土師器	無台椀			-	-	4.8	-	-	ロクロ（右），回転糸切り	10YR8/4 浅黄橙	精良	焼成普通		
17	25号溝	23C1　1	黒色土器	有台椀	B		-	-	5.2	3.4	-	外：ロクロケズリ→工具ナデ?	2.5Y4/1 黄灰	1mm以下の長・石，微細雲	焼成良好		
18	26号溝	23D1　1	土師器	無台椀			-	-	5.0	-	-	ロクロ（右），回転糸切り	10YR8/3 浅黄橙	精良，1mm以下の長・石，微細雲多	内底面に溝有		
19	26号溝	23D1　1	須恵器	有台杯			-	-	8.0	1.4	-	ロクロ	5Y6/1 灰	1mm以下の長	焼成良好，内面自然釉付着・焼成時の弾け有		
20	26号溝	23D1　1	土師器	無台椀			-	-	5.4	1.2	-	ロクロ（右），回転糸切り	10YR6/3 にぶい黄橙	2mm以下の長・石，微細雲多	焼成良好，内面一部黒色付着物有		
21	26号溝	23D1　1	土師器	小甕			13.4	-	-	1.6	-	ロクロ	10YR6/3 にぶい黄橙	2mm以下の長・石多	焼成普通		
22	28号溝	22A3·4　1	土師器	甕			-	-	-	1.6	-	ロクロ	7.5YR6/3 にぶい褐	3mm以下の長・石多	焼成良好，黒色付着物		
23	28号溝	22A3·4　1	須恵器	無台杯	B	1	13.0	3.3	8.4	1.2	25.2	ロクロ，ヘラキリ→ナデ?	2.5Y8/2 灰白	シルト質，石多	焼成瓦質，口縁外面スス付着		4
24		6A2　Ⅱ	須恵器	無台杯	B		12.1	2.9	8.0	1.2	24.0	ロクロ，ヘラキリ→ロクロナデ	10Y6/1 灰	シルト質，精良，1mm以下の長，3mmの長微，黒色噴出物多	焼成良好（やや軟質），内底面擦れ	11	4·7
25		22P1　Ⅰ	須恵器	無台杯	B		11.8	2.7	7.0	1.4	22.9	ロクロ，ヘラキリ	10Y6/1 灰	シルト質，精良，1mm以下の長，黒色噴出物	焼成良好，内底面擦れ		
26		19B2　Ⅱ	須恵器	無台杯	C		11.1	3.3	8.2	1.3	29.7	ロクロ，ヘラキリ→ナデ	5Y7/1 灰白	3mm以下の長・石	焼成瓦質		4
27		13A2　Ⅱ	須恵器	無台杯	A		12.8	3.6	7.8	1.3	28.1	ロクロ，ヘラキリ→ナデ	5Y7/1 灰白	シルト質，精良，2mm以下の長少，黒色噴出物	焼成良好，内底面ナデ		
28		23K1　Ⅲ	須恵器	無台杯	A		8.6	-	-	1.3	-	ロクロ，ヘラキリ→ナデか	10Y6/1 灰	3mm以下の石，2mm以下の長，黒色噴出物微	焼成良好		
29		22C5　乱	須恵器	有台杯			-	-	7.8	3.8	-	ロクロ，ロクロケズリ	N5/0 灰	シルト質，3mm以下の長	焼成良好，内底面擦れ?		
30		6B2　Ⅱ	須恵器	折縁杯	B		12.5	3.9	7.6	1.3	31.2	ロクロ，ナデ	10Y6/1 灰	砕石質，5mm以下の長・石多	焼成良好，内底面擦れ，外底面ヘラ書き?（一本線），分析5		4
31		22B3　Ⅲ	須恵器	折縁杯	A		13.4	4.1	6.2	1.4	30.6	ロクロ	5Y7/1 灰白	シルト質，3mm以下の長多	焼成良好，内底面擦れ		
32		21A5　Ⅲ	須恵器	杯蓋			13.2	3.1	2.8	2.3	23.5	ロクロ，ロクロケズリ	N7/0 灰	シルト質，精良，1mm以下の長・石，黒色噴出物少	焼成良好，単独焼成，歪み有，外面降灰，内面墨付着，内天井ヘラ書き「一」，分析7		4·7
33		15A2　Ⅱ	須恵器	杯蓋			13.6	2.5	2.5	1.6	18.0	ロクロ，ロクロケズリ	10Y6/1 灰	シルト質，精良，1mm以下の長微	焼成良好		4
34		19B5　Ⅱ	須恵器	杯蓋			14.0	3.1	3.6	1.12	22.1	ロクロ，ロクロケズリ	2.5GY6/1 オリーブ灰	シルト質，精良，1mm以下の長多	焼成良好，外面口縁部降灰，内底面擦れ，墨付着，転用硯か		
35		23B1　Ⅲ	須恵器	杯蓋			13.0	-	-	1.8	-	ロクロ，ロクロケズリ	5Y6/1 灰	シルト質，精良，2mm以下の長微	焼成良好，外面降灰，内面擦れ		
36		3B4　Ⅱ	須恵器	杯蓋			-	-	3.5	-	-	ロクロ，ロクロケズリ	5Y6/1 灰	砕石質，1mm以下の長，黒色噴出物多	焼成良好，内面墨付着		
37		23ABD1　Ⅲ	須恵器	甕			-	-	-	-	-	ロクロ	2.5Y7/1 灰白	5mm以下の長・石多，2mm以下の白色岩石粒	焼成やや軟質（瓦質），分析9		4
38		23J1　Ⅲ	須恵器	甕			-	-	-	-	-	ロクロ，波状沈線	7.5Y5/1 灰	5mm以下の石，2mm以下の長・石，黒色噴出物微	焼成良好		
39		23F1　Ⅲ	須恵器	甕			-	-	-	-	-	ロクロ，波状沈線	5Y6/1 灰	3mm以下の石多，1mm以下の長微	焼成良好		
40		22列　Ⅰ	須恵器	短頸壺			11.0	-	-	1.4	-	ロクロ，カキメ	7.5Y6/2 灰	2mm以下の長少	焼成良好，焼成時蓋かかりの痕跡有		

No.	遺構	調査地・層位	種別	器種	分類		計測値(cm) 口径	器高	底径(摘径)	遺存度	器口指数	成形・調整	色調	胎土	備考	挿図	写真図版
41		21AB4 Ⅲ	須恵器	長頸壺			15.6	-	-	1.6	-	ロクロ	2.5Y5/1 黄灰	砕石質，5mm以下の石，2mm以下の長・石・極多	焼成良好，糸巻付痕？	11	6
42		22M1·2 Ⅰ	須恵器	壺			-	-	11.4	2.3	-	体部：タタキ→ナデ→ケズリ・ユビオサエ，底：タタキ→ナデ	5Y6/2 灰オリーブ	3mm以下の長・石多	焼成普通，内面降下物付着，一部別個体付着		4
43		23B1 Ⅲ	須恵器	甕			19.0	-	-	1.12	-	ロクロ，ナデ，タタキ，カキメ	10Y6/1 灰	1mm以下の長多，黒色噴出物微	焼成良好，外面・口縁内面に自然釉付着		
44		23B1 Ⅲ	須恵器	甕			-	-	-	-	-	タタキ→カキメ	N7/0 灰	2mm以下の長多，石，黒色噴出物	焼成良好，別個体融着		
45		23B1 Ⅲ	須恵器	横瓶			-	-	-	1.4	-	外：カキメ，内：ロクロ	2.5Y5/1 黄灰	3mm以下の長，1mm以下の長・石，黒色噴出物微	焼成良好，外面自然釉，別個体融着	12	4
46		22G5 乱	須恵器	鉢			-	-	14.2	1.4	-	外：ロクロ，内：ナデ	N6/0 灰	3mm以下の長・石，流紋岩多	焼成良好，底部外面は弾け有		
47		23C1 Ⅲ	土師器	甕			23.4	-	-	1.12	-	ロクロ	10YR6/2 灰黄褐	2mm以下の長・石多，微細雲	焼成良好		6
48		22B2 Ⅲ	土師器	鍋			42.0	-	-	1.8	-	カキメ	2.5Y7/3 浅黄	2mm以下の長・石	焼成普通		
49		21B4 Ⅲ	土師器	鍋			29.0	-	-	1.12	-	ロクロ，カキメ	2.5Y4/1 黄灰	2ミリ以下の長・石多，微細雲	焼成良好		
50		22A1 Ⅲ	土師器	鍋			29.0	-	-	1.12	-	ロクロ	2.5Y7/3 浅黄	3mm以下の長・石，微細雲少	焼成良好		
51		21B3 Ⅲ	土師器	鍋			32.0	-	-	1.12	-	ロクロ，カキメ	10YR6/3 にぶい黄橙	2mm以下の長・石多，微細雲	焼成良好		
52		23B1 Ⅲ	土師器	不明			-	-	-	-	-	外：ユビオサエ，内：ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	2mm以下の長・石多	内面黒色化		7
53		23B1 Ⅲ	土師器	不明			-	-	-	-	-	内：ナデ	2.5Y7/3 浅黄	5mm以下の長・石	焼成良好，内面黒色化，外面に台？が剥がれた痕跡？有		
54		南集中	須恵器	無台杯	B	1	12.5	2.8	8.3	2.3	22.0	ロクロ(右)，ヘラキリ	5Y6/1 灰	シルト質，精良，3mm以下の長，1mm以下の褐色粒	焼成良好，内底面擦れ，底部墨書　分析1	13	4・7
55		南集中	須恵器	無台杯	B	1	12.0	2.9	8.0	1.3	24.2	ロクロ(右)，ヘラキリ	5Y6/1 灰	シルト質，精良，2mm以下の長	焼成良好，底部墨書　分析2		7
56		南集中	須恵器	無台杯	B	1	12.4	3.1	7.0	1.4	24.6	ロクロ(左)，ロクロケズリ，ロクロヘラキリ	5Y6/1 灰	シルト質，精良，1mm以下の長	焼成良好，内外面褐色付着物有		4
57		南集中	須恵器	有台杯			-	-	7.8	-	-	ロクロ，ヘラキリ→ロクロ	5Y6/1 灰	シルト質，1mm以下の長，黒色噴出物多	焼成良好，歪み有		
58		南集中	土師器	無台椀	B	2	12.1	4.0	5.5	1.3	33.1	ロクロ(右)，回転糸切り	7.5YR6/4 にぶい黄	3mm以下の石微，微細雲	焼成良好，内面擦れ・付着物(油煙痕？)，底部墨書，糸巻付痕		4・7
59		南集中	土師器	無台椀	A	1	13.5	4.0	5.8	1.3	29.6	ロクロ(右)，回転糸切り	10YR6/2 灰黄褐	精良，砂粒をほとんど含まない，微細雲	焼成良好，やや焼き歪み有，外面(朱)漆書，外底部縁辺擦れ，内底面擦れ，内面褐色，底部墨書		7
60		南集中	土師器	無台椀	B	1	14.6	4.7	6.2	1.4	32.2	ロクロ(右)，回転糸切り	10YR6/3 にぶい黄橙	精良，微細雲	焼成良好，底部墨書		4
61		南集中	土師器	無台椀	B	1	12.2	3.8	5.0	1.2	31.3	ロクロ(右)，回転糸切り	10YR6/2	精良，2mm以下の長・石微，微細雲多，褐雲多	焼成良好		5
62		南集中	土師器	無台椀	B	1	12.4	3.8	5.8	1.3	30.6	ロクロ(右)，回転糸切り，内：ナデミガキ	10YR7/2 にぶい黄橙	精良，砂粒をほとんど含まない，微細雲多	焼成良好，糸巻付痕		
63		南集中	土師器	無台椀	B	1	12.2	4.2	5.3	1.2	34.4	ロクロ(左)，回転糸切り，内：ナデミガキ	10YR7/3 にぶい黄橙	1mm以下の赤色土粒多，3mm以下の石多	焼成良好，糸巻付痕か		5
64		南集中	土師器	無台椀	B	1	12.8	4.5	5.0	2.3	35.2	ロクロ(左)，回転糸切り→軽ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	3mm以下の石多，1mm以下の赤色土粒多，微細雲多	焼成良好，糸巻付痕か		
65		南集中	土師器	無台椀	B	1	12.5	3.8	5.8	1.4	30.5	ロクロ(右)，回転糸切り	10YR6/3 にぶい黄橙	精良，砂粒をほとんど含まない	焼成良好，内面擦れ		
66		南集中	土師器	無台椀	B	2	14.7	4.6	5.2	1.4	31.3	ロクロ(右)，回転糸切り	10YR7/2 にぶい黄橙	精良，微細雲多，砂粒をほとんど含まない	焼成良好，内底面擦れ，糸巻付痕		
67		南集中	土師器	無台椀	B	1	12.0	4.3	5.1	1.2	35.8	ロクロ(右)，回転糸切り	7.5YR7/2 明褐灰	精良，砂粒少	焼成良好，内外面擦れ		5
68		南集中	土師器	無台椀	B	1	13.2	4.1	5.4	1.4	30.8	ロクロ(右)，回転糸切り	7.5YR7/2 明褐灰	精良，微細雲少，2mm以下の赤色粒子多	焼成良好，体部刻書		
69		南集中	土師器	無台椀	A	1	13.1	3.5	5.4	-	26.9	ロクロ(右)，回転糸切り	10YR7/2 にぶい黄橙	精良，微細雲少	焼成やや軟質		
70		南集中	土師器	無台椀	B	1	12.3	3.9	5.0	1.2	31.8	外：ロクロ，回転糸切り，内：ミガキ？	10YR7/2 にぶい黄橙	精良，微細雲少，1～2mmの赤色粒子	焼成良好		5
71		南集中	土師器	無台椀	B	1	13.9	4.3	5.2	3.8	30.9	ロクロ(右)，回転糸切り	10YR8/2 灰白	精良，2mm以下の石，1mm以下の赤色土粒	焼成良好，外底部縁辺擦れ，内面擦れ		
72		南集中	土師器	無台椀	B	1	13.0	3.9	4.4	1.3	30.0	ロクロ(右)，回転糸切り	10YR6/3 にぶい黄橙	精良，1mm以下の赤色土粒微	焼成良好，内外面うっすら付着物有		
73		南集中	土師器	無台椀	B	1	12.8	4.3	5.2	1.4	33.6	ロクロ，糸切り	10YR7/2 にぶい黄橙	2mm以下の石，赤色土粒微，雲	焼成良好，内面擦れ，糸巻付痕		
74		南集中	土師器	無台椀	A	1	13.2	3.6	5.9	1.3	27.3	ロクロ	2.5Y7/2 灰黄	精良，微細雲多	焼成良好，外面斑状黒色付着物有，内面黒色化？		
75		南集中	土師器	無台椀	B	1	12.3	3.9	5.1	1.4	31.5	ロクロ(右)，回転糸切り	10YR6/3 にぶい黄橙	精良	焼成良好，糸巻付痕		5
76		南集中	土師器	無台椀	B	1	12.1	4.3	5.0	1.3	35.6	ロクロ(右？)，回転糸切り	10YR6/3 にぶい黄橙	精良，微細雲	焼成やや不良，糸巻付痕		
77		南集中	土師器	無台椀	B	1	11.8	4.4	5.0	1.3	37.3	ロクロ，糸切り	7.5YR6/3	2mm以下の長・石，赤色粒子多，微細雲	焼成良好，外面褐色付着物有		5
78		南集中	土師器	無台椀	B	1	12.1	3.9	5.0	1.4	32.1	ロクロ(右)，回転糸切り	10YR7/2 にぶい黄橙	5mm以下の石，2mm以下の長多，微細雲	焼成良好		
79		南集中	土師器	無台椀	B	1	12.3	4.3	5.4	1.4	35.0	ロクロ(左)，回転糸切り	10Y8/2 灰白	3mm以下の石，1mm以下の長，赤色土粒多	焼成やや不良		
80		南集中	土師器	無台椀	B	1	12.3	3.8	5.4	1.3	30.9	ロクロ(右)，回転糸切り	10YR6/3 にぶい黄橙	1mm以下の長少，微細雲	焼成良好，外面黒色付着物有(ススか)		5
81		南集中	土師器	無台椀	B	1	12.0	3.7	5.3	1.4	30.8	ロクロ(右)，回転糸切り	5Y6/4 にぶい橙	2mm以下の長・石多，微細雲少	焼けすぎ，やや歪み有，糸巻付痕		

No.	遺構	調査地・層位	種別	器種	分類		計測値 (cm) 口径	器高	底径(摘径)	遺存度	器口指数	成形・調整	色調	胎土	備考	挿図	写真図版
82		南集中	土師器	無台椀			-	-	6.8	1.2	-	ロクロ(右), 回転糸切り	10YR7/2 にぶい黄橙	精良, 砂粒をほとんど含まない, 微細雲	焼成良好, 焼き膨れ有	14	
83		南集中	土師器	無台椀	A	1	13.0	3.9	5.9	3.8	29.6	ロクロ(左), 回転糸切り	10YR6/3 にぶい黄橙	精良, 砂粒をほとんど含まない, 微細雲	焼成良好, 内底面擦れ, 糸巻付痕		
84		南集中	土師器	無台皿			14.5	2.8	5.6	1.2	19.3	ロクロ(右), 回転糸切り	10YR7/2 にぶい黄褐	精良, 微細雲	焼成良好, 内底面擦れ, 墨書		7
85		南集中	土師器	無台椀	B	1	12.2	4.7	5.0	2.3	38.5	ロクロ(左), 回転糸切り	7.5YR7/4 にぶい橙	2mm以下の長, 石, 赤色土粒多, 微細雲多	焼成良好(やや軟質), 糸巻付痕		5
86		南集中	土師器	有台皿			-	-	5.3	-	-	回転糸切り(右)	10YR6/3 にぶい黄橙	精良, 2mm以下の石微, 微細雲	焼成良好, 内底面焼成時(もしくは乾燥時)のヒビ有		
87		南集中	黒色土器	無台椀	A	2	15.2	5.0	6.8	3.8	32.9	外:ロクロ, ロクロケズリ, 内:ミガキ	7.5Y7/2 明褐灰	精良, 砂粒をほとんど含まない, 微細雲微	焼成良好, 外面黒色付着物有		
88		南集中	黒色土器	無台椀	A	2	14.0	4.4	5.8	1.3	31.4	外:ロクロ, ロクロケズリ, 内:ミガキ	10YR7/2 にぶい黄橙	精良, 微細雲多, 1mm以下の赤色粒子少	焼成良好, 底部墨書		5・7
89		南集中	黒色土器	無台椀	A		15.0	-	-	-	-	外:ロクロミガキ?, ロクロケズリ, 内:ミガキ	2.5Y6/3 にぶい黄	精良	焼成良好, 口縁擦れ		
90		南集中	黒色土器	無台椀	A	2	14.2	5.1	6.0	1.3	35.9	外:ミガキ, ロクロ, ロクロケズリ, 内:ミガキ	10YR7/2 灰黄褐	精良, 砂粒をほとんど含まない, 微細雲, 1mm前後の赤色粒多	焼成良好, 内面擦れ, 体部刻書		5・7
91		南集中	黒色土器	無台椀	A	2	14.5	4.6	5.8	1.3	31.7	外:ロクロミガキ, ロクロケズリ, 内:ミガキ	10YR7/2 にぶい黄橙	精良	焼成良好, 口縁擦れ		
92		南集中	黒色土器	無台椀	A	2	11.8	4.1	5.0	1.7	34.7	外:ミガキ, ロクロミガキ, 内:ミガキ	10YR6/2 灰黄褐	精良	焼成良好		5
93		南集中	黒色土器	無台椀	A	1	15.3	4.5	5.8	1.4	29.4	外:ロクロ, ロクロケズリ, 底:ロクロケズリ→ロクロミガキ?, 内:ミガキ	10YR6/3	精良, 1mm以下の赤色土粒, 微細雲微	焼成良好		
94		南集中	黒色土器	無台椀	A	1	14.2	4.3	5.6	1.3	29.9	外:ミガキ, ロクロ, ロクロミガキ, 内:ミガキ	7.5Y6/3 にぶい褐	精良	焼成良好, 外面褐色付着物有, 内底面擦れ		
95		南集中	黒色土器	無台椀	A		-	-	5.5	-	-	外:ロクロ, ロクロケズリ, 内:ミガキ	10YR6/2 灰黄褐	1mm以下の石, 赤色粒子微, 微細雲	焼成良好, 外面劣化顕著		
96		南集中	黒色土器	無台鉢	A		20.3	8.0	7.8	1.2	39.2	外:ナデ, ロクロ, 内:ミガキ	10YR7/1 灰白	精良, 微細雲少, 2mm以下の赤色粒子多	焼成良好, 若干歪み有, 口縁部内面擦れ		5
97		南集中	黒色土器	無台鉢	A		18.7	7.4	7.2	1.3	39.4	外:ロクロミガキ, ロクロケズリ, 内:ミガキ	10YR6/2 灰黄褐	精良, 微細雲少, 2mm以下の赤色粒子多	焼成良好, 口縁部内面擦れ		
98		南集中	黒色土器	無台椀	A	2	11.8	4.4	4.8	1.2	37.3	口:ナデ,体部:ロクロ(右), ロクロケズリ, 内:ミガキ	10YR7/2 にぶい黄橙	精良, 1mm以下の赤色粒子	焼成良好, 歪み有, 外底部縁辺擦れ, 口縁部擦れ		6
99		南集中	黒色土器	有台椀	B	2	11.4	4.3	4.7	1.4	37.7	ミガキ, 台:ロクロケズリ→ナデ	(N1.5/0 黒)	精良, 砂粒をほとんど含まない	焼成良好		
100		南集中	黒色土器	有台椀	B	2	11.3	4.1	4.8	1.6	36.3	外:ロクロケズリ, 内:ミガキ	(N3/0 暗灰)	精良, 砂粒をほとんど含まない, 微細雲	焼成良好, 口縁部内面擦れ, 内底面擦れ		6
101		南集中	黒色土器	有台椀	B	1	12.4	4.3	5.4	1.4	34.4	ミガキ, ロクロケズリ	(N1.5/0 黒)	精良, 砂粒をほとんど含まない, 微細雲	焼成良好, 口縁部内面擦れ		
102		南集中	黒色土器	有台椀	B	1	11.6	3.7	5.4	1.6	31.9	外:ミガキ, 台:ロクロミガキ, 内:ミガキ	N2/1 黒	精良	焼成良好		
103		南集中	黒色土器	有台椀	B	1	12.3	4.1	4.8	1.4	32.9	外:ロクロミガキ, 台:ロクロケズリ, 内:ミガキ	N2/1 黒	精良	焼成良好, 口縁部内面擦れ, 内底面擦れ		6
104		南集中	黒色土器	有台椀	B	2	11.0	4.0	4.6	1.2	36.4	外:ミガキ, 台:ロクロケズリ, 内:ミガキ	N2/0 黒	精良	焼成良好, 口縁擦れ		
105		南集中	黒色土器	有台椀	B		11.8	-	-	-	-	外:ロクロミガキ, 内:ミガキ	N3/0 暗灰	精良	焼成良好, 外面擦れ顕著		
106		南集中	黒色土器	有台椀	B		12.2	-	-	1.6	-	外:ロクロミガキ, 内:ミガキ	N2/1 黒	精良	焼成良好, 外面擦れ顕著		
107		南集中	黒色土器	有台椀	B		11.2	-	-	1.3	-	外:ミガキ, ロクロミガキ, 内:ミガキ	N2/1 黒	精良, 微細雲	焼成良好		
108		南集中	黒色土器	有台椀	B		11.3	-	-	-	-	外:ロクロミガキ, 内:ミガキ	N2/1 黒	精良	歪み有		
109		南集中	黒色土器	有台皿	B		12.2	-	-	1.2	-	ミガキ	(N2/0 黒)	精良, 砂粒をほとんど含まない, 微細雲	焼成良好, 内外面擦れ		6
110		南集中	黒色土器	無台椀	B		-	-	4.6	1.4	-	ロクロミガキ	N2/0 黒	精良	焼成良好, 内外面燻し銀光沢有	15	
111		南集中	黒色土器	有台皿	B		11.9	2.5	5.2	1.2	20.6	外:ロクロミガキ, 台:ロクロケズリ, 内:ミガキ	N1.5/0 黒	精良	焼成良好		6
112		南集中	黒色土器	有台皿	B		-	-	4.2	-	-	ロクロミガキ	N2/0 黒	精良	焼成良好		
113		南集中	黒色土器	有台皿	B		-	-	5.2	2.3	-	ミガキ, ロクロミガキ	N2/0 黒	精良	焼成良好		
114		南集中	須恵器	甕			46.0	-	-	-	-	口:ロクロ・波状沈線, 肩:タタキ	N5/0 灰	1mm以下の長・石	焼成良好, 分析 8		
115		南集中	須恵器	横瓶			11.0	-	-	1.3	-	口外:ロクロ, 口内:ヘラナデ, 内:カキメ	2.5Y5/1 黄灰	精良	焼成良好, 分析 10		6
116		Z27	土師器	無台椀	A	2	13.1	3.9	5.6	1.3	29.9	体部上半:弱ロクロケズリ, ロクロ(右), 回転糸切り	10YR8/3 浅黄橙	精良, 微細雲, 1mm以下の赤色粒子少	焼成良好, 外面膜状に炭化物付着(油煙痕?), 口縁部内面に炭化物塊付着		
117		Z27	土師器	無台椀	B	1	12.0	3.8	4.9	1.6	31.7	外:ロクロ, ロクロケズリ, 内:ロクロ, ミガキ?	7.5YR6/2 灰褐	1～2mmの長・石, 微細雲	焼成良好		
118		Z27	土師器	無台椀	B	2	13.1	4.3	5.4	1.3	32.8	ロクロ(右), 回転糸切り	7.5YR6/3 にぶい褐	1mm以下の長・石多, 微細雲多	焼成良好, 口縁部内外面黒色化, 内底面パッチ状付着物有(炭化物?), 糸巻付痕		
119		Z27	土師器	無台椀	B	2	12.0	3.9	5.4	1.6	32.5	ロクロ, 回転糸切り	7.5YR6/3 にぶい褐	精良, 2～3mmの石微, 微細雲	焼成良好, 外面擦れ, 口縁部内面擦れ顕著, 内底面擦れ, 内面褐色化, 糸巻付痕		
120		Z27	土師器	無台椀			15.0	-	-	1.12	-	ロクロ	10YR7/2 にぶい黄橙	精良, 微細雲多, 1mm以下の長・石, 赤色土粒	焼成良好, 口縁部擦れ, 内面一部黒色化, 体部墨書		7
121		Z27	土師器	無台椀			14.4	-	-	1.12	-	ロクロ	7.5YR7/3 にぶい橙	精良, 微細雲微, 赤色土粒微	焼成良好, 口縁部擦れ, 体部墨書		
122		Z27	土師器	無台椀			14.0	-	-	1.8	-	ロクロ	10YR7/3 にぶい黄橙	精良, 赤色土粒, 骨微	焼成やや軟質, 外面擦れ, 内外面大半黒色化, 墨書		

No.	遺構	調査地・層位	種別	器種	分類		計測値 (cm) 口径	器高	底径(摘径)	遺存度	器口指数	成形・調整	色調	胎土	備考	挿図	写真図版
123		Z27	土師器	小甕			-	-	6.0	-	-	ロクロ(右), ヘラケズリ, 回転糸切り	10YR6/2 灰黄褐	3mm以下の長・石多, 微細雲	焼成良好, 外面炭化物付着, 底部刻書	15	
124		立会い	土師器	無台椀			-	-	-	-	-	ロクロ	10YR6/3 にぶい黄橙	微細雲多, 赤色土粒微	焼成良好, 墨書		7
125		Z27	土師器	無台皿			14.8	2.9	5.4	3.8	19.6	ロクロ(右), 回転糸切り	7.5YR7/3 にぶい黄橙	精良, 2mm以下の石, 1mm以下の赤色土粒	焼成良好, 糸巻付痕		6
126		Z27	土師器	有台皿			-	-	5.0	-	-	ロクロ(右), 回転糸切り	10YR6/3 にぶい黄橙	精良, 3mm以下の石微, 微細雲	焼成良好		
127		Z27	土師器	無台皿			-	-	5.4	-	-	ロクロ(右), 回転糸切り	10YR6/3 にぶい黄橙	精良, 砂粒をほとんど含まない, 赤色粒子微, 微細雲	焼成良好, 内底面褐色化, 糸巻付痕		
128		立会い	須恵器	無台杯	B	1	13.0	3.0	8.0	1.4	22.7	ロクロ	N6/0 灰	シルト質, 精良, 1mm以下の長少, 3mm以下の黒色噴出物	焼成やや軟質, 分析3		
129		立会い	須恵器	無台杯	B	1	11.4	2.6	6.0	1.5	22.8	ロクロ, ロクロヘラキリ→ナデ?	N5/0 灰	シルト質, 精良, 1mm以下の長	焼成良好, 内面墨の付着, 内底面擦れ, 転用硯か		
130		立会い	須恵器	無台杯	B	1	12.7	3.0	8.0	1.6	23.6	ロクロ, ナデ	10Y6/1 灰	シルト質, 精良, 1mm以下の長多	焼成良好, 内外面褐色付着物有, 内面墨付着, 内底面擦れ, 転用硯か		
131		立会い	須恵器	無台杯	B	2	11.9	2.7	7.0	1.6	22.3	ロクロ, ナデ	N5/0 灰	精良, 1mm以下の長多, 黒色噴出物多	焼成良好		
132		立会い	須恵器	無台杯	B	1	12.8	3.0	8.0	1.2	23.0	ロクロ(左), ヘラキリ→ナデ	10Y6/1 灰	シルト質, 精良, 1mm以下の長	焼成良好, 内外面褐色付着物有, 内面擦れ		
133		立会い	須恵器	無台杯	B	1	12.2	3.0	8.2	1.3	24.6	ロクロ, ヘラキリ→ナデ	10Y6/1 灰	シルト質, 精良, 1mm以下の長	焼成良好, 内底面擦れ		
134		立会い	須恵器	無台杯	A	1	13.0	3.0	7.6	3.8	23.1	ロクロ, ヘラキリ	N6/0 灰	6mm以下の長, 4mm以下の石	焼成良好		
135		立会い	須恵器	無台杯	A	1	12.8	3.0	9.6	3.8	23.4	ロクロ	10Y6/1 灰	5mm以下の長, 2mm以下の石多	焼成良好, 内底面にロクロケズリか?		
136		立会い	須恵器	無台杯	A	1	-	-	7.0	1.3	-	ロクロ, ヘラキリ→ナデ	5Y7/1 灰白	シルト質, 精良	焼成やや軟質, 底部刻書　分析4		7
137		立会い	須恵器	有台杯			-	-	9.2	1.3	-	ロクロ, ロクロケズリ	10Y6/1 灰	シルト質, 精良	焼成良好, 内底面擦れ		6
138		立会い	須恵器	有台杯			12.5	3.6	3.7	1.2	28.4	ロクロ, ナデ	N6/0 灰	粘土質?, 5mm以下の長, 3mm以下の石	焼成良好, 内底面擦れ, 黒色付着物有, 分析6		7
139		立会い	須恵器	無台杯	A		-	-	-	-	-	ヘラキリ→ナデ	5Y6/1 灰	シルト質, 1mm以下の長多	焼成良好(やや軟質), 墨書		
140		立会い	須恵器	杯蓋			-	-	3.1	-	-	ロクロ, ロクロケズリ	10Y5/1 灰	やや砕石質, 1mm以下の長多	焼成良好, 内面降灰		
141		立会い	須恵器	杯蓋			-	-	3.0	1.4	-	ロクロ, ヘラキリ	10Y6/1 灰	シルト質, 精良, 1mm以下の長多	焼成良好, 内面擦れ		
142		立会い	土師器	無台椀	B	1	14.3	4.6	5.6	1.6	31.8	ロクロ(右), 回転糸切り	10YR6/3 にぶい黄橙	精良, 砂粒をほとんど含まない, 微細雲	焼成良好, 糸巻付痕		
143		立会い	土師器	無台椀	B	1	11.2	3.9	5.2	1.3	34.8	ロクロ, 回転糸切り	7.5YR7/3 にぶい黄橙	2mm以下の長・石多	焼成やや不良, 内面擦れ	16	6
144		立会い	土師器	無台椀	B	1	11.8	3.7	5.2	1.2	31.4	ロクロ(右), 回転糸切り	7.5YR7/3	精良, 砂粒をほとんど含まない, 微細雲	焼成良好(やや軟質), 内底面擦れ, 体部墨書		
145		立会い	土師器	無台椀			-	-	4.5	-	-	ロクロ(右), 回転糸切り	10YR6/3 にぶい黄橙	精良, 微細雲少	焼成良好, 内外面擦れ, 底部墨書		7
146		立会い	土師器	無台椀			-	-	-	-	-	ロクロ	10YR6/3 にぶい黄橙	精良	焼成良好, 墨書		
147		立会い	土師器	無台椀	B	1	11.8	3.6	5.6	1.6	30.5	ロクロ, 糸切り	10YR7/2 にぶい黄橙	精良, 2mm以下の長微	焼成良好, 体部墨書, 内底面擦れ		6
148		立会い	土師器	有台皿			-	-	5.4	1.2	-	ロクロ(右), 回転糸切り	10YR7/2 にぶい黄橙	精良, 砂粒をほとんど含まない	焼成良好, 外底面縁辺粘土めくれ		
149		立会い	土師器	有台皿			-	-	4.6	1.2	-	ロクロ(右), 回転糸切り	10YR7/2 にぶい黄橙	3mm以下の長・石, 微細雲	焼成良好		
150		立会い	黒色土器	無台椀	A		-	-	6.4	1.4	-	外:ロクロケズリ, 内:ミガキ	7.5YR6/3 にぶい褐	精良, 微細雲	焼成良好, 糸巻付痕?, 底部墨書		7
151		立会い	黒色土器	無台椀	A		-	-	5.0	1.2	-	外:ロクロ, ロクロケズリ, 内:ミガキ	7.5YR6/3 にぶい褐	精良, 微細雲, 3mm以下の石	焼成良好, 底部墨書		
152		立会い	黒色土器	無台鉢	A		-	-	11.0	1.16	-	外:ロクロケズリ?, 内:ミガキ	10YR6/2	精良, 微細雲少	焼成良好, 糸巻付痕か		
153		立会い	黒色土器	有台皿	A		-	-	5.0	-	-	台:ユビオサエ	10YR8/2	精良	焼成良好, 付け高台		
154		立会い	黒色土器	有台皿	B		-	-	5.4	1.2	-	外:ロクロミガキ	7.5Y4/1 灰	精良	焼成やや不良, 付け高大		
155		立会い	黒色土器	有台皿	B		-	-	4.6	-	-	外:ロクロミガキ	7.5Y4/1 灰	精良	焼成良好		
156		立会い	黒色土器	無台椀	A		-	-	6.4	-	-	外:ロクロミガキ, 内:ミガキ	10YR7/3 にぶい黄橙	精良	内底面暗文		
157		立会い	須恵器	甕			27.2	-	-	1.6	-	口:タタキ→ロクロ, 頸:ロクロケズリ, 肩:タタキ→ケズリ	N4/0 灰	1mm以下の長多	焼成良好		
158		立会い	須恵器	甕			26.4	-	-	1.6	-	口:ロクロ, 頸:ロクロケズリ	N5/0 灰	2mm以下の長・石多	焼成良好, 糸巻付痕		6
159		立会い	須恵器	甕			27.0	-	-	1.6	-	ロクロ, 工具ナデ, タタキ	10YR5/1 褐灰	シルト質, 1mm以下の長	焼成良好		
160		立会い	須恵器	甕			-	-	-	-	-	ロクロ, タタキ	2.5GY5/1 オリーブ灰	1mm以下の石多	焼成良好(硬質)		
161		立会い	須恵器	甕			-	-	-	-	-	ロクロ, 工具ナデ?, タタキ	N5/0 灰	5mm以下の石, 2mm以下の石	焼成普通		6
162		立会い	須恵器	壺			-	-	13.0	1.4	-	外:ナデ・ロクロケズリ・ロクロ, 内:ロクロ	7.5Y5/1 灰	1mm以下の長, 黒色噴出物多	焼成良好, 台部に板抜痕		
163		立会い	須恵器	横瓶			-	-	-	1.6	-	外:カキメ, 内:ロクロ	7.5Y6/1 灰	2mm以下の長・石, 黒色噴出物微	焼成良好, 内外面自然釉, 別個体?融着		

No.	遺構	調査地・層位	種別	器種	分類		計測値(cm) 口径	器高	底径(摘径)	遺存度	器口指数	成形・調整	色調	胎土	備考	挿図	写真図版
164		立会い	土師器	甕			19.0	-	-	1.12	-	ロクロ，カキメ	10YR7/3 にぶい黄橙	1mm以下の長・石，微細雲	焼成良好，外面炭化物付着	16	6
165		立会い	土師器	小甕			12.0	-	-	1.8	-	ロクロ	10YR5/2 灰黄褐	2mm以下の石	焼成良好，内外面口縁に炭化物付着		
166		立会い	須恵器	無台杯	B	1	-	-	8.4	1.6	-	ロクロ	2.5Y6/1 黄灰	2mm以下の長・石多	焼成良好，漆付着		1
167		立会い	黒色土器	椀	A		-	-	-	-	-	ロクロ	10YR6/2	精良	漆紙付着		
168		立会い	緑釉陶器	椀			-	-	-	-	-	ロクロ	5Y7/3 浅黄	精良，1mm以下の長	釉は淡緑色，焼成やや不良(土師質)，洛北産か		
169		69 トレンチ 土坑	土師器	甕			18.8	-	-	1.8	-	口外：ハケメ→ナデ，頸外：ナデ，体外：ハケメ，内：ハケメ	7.5YR8/6 浅黄橙	精良，石多	古墳時代前期，焼成良好	17	
170		69 トレンチ 土坑	土師器	壺			-	-	-	1.6	-	ナデ，ハケメ	10YR8/4 浅黄橙	やや不良，3mm以下の石多	古墳時代前期，焼成良好		
171		69 トレンチ 土坑	土師器	甕			-	-	5.3	全周	-	外：ケズリ，内：ハケメ	7.5YR7/3 にぶい橙	精良，石	古墳時代前期，焼成良好		
172		69 トレンチ 土坑	土師器	器台			-	-	13.8	1.4	-	外:ケズリ・ナデ，ユビオサエ？，内：ケズリ	5YR7/6 橙	長少，石多，雲微，赤色土粒	古墳時代前期，焼成良好		
173		69 トレンチ 土坑	土師器	器台			10.4	-	-	1.8	-	外：ミガキ	7.5YR8/3 浅黄橙	精良，石少	古墳時代前期，焼成良好		
174		69 トレンチ 2	土師器	器台			-	-	14.6	1.8	-	外:ケズリ，ナデ，内：ケズリ	10YR7/3 にぶい黄橙	長・石多，雲少	古墳時代前期，焼成良好		
175		69 トレンチ 2	土師器	甕			15.0	-	-	1.4	-	ヘラナデ，ケズリ	5YR7/6 橙	精良，石，雲少	古墳時代前期，焼成やや良好		
176		55 トレンチ 4	土師器	壺			17.9	-	-	1.8	-	ナデ	5YR8/4 淡橙	精良，石少	古墳時代前期，焼成良好		
177		55 トレンチ 4	土師器	壺			-	-	-	1.8	-	外:ナデ・ハケメ，内：ナデ	2.5Y8/2 灰白	精良	古墳時代前期，焼成良好		
178		21B4 Ⅲ	白磁	碗			-	-	-	-	-		5GY8/1 灰白				
179		38 トレンチ 2	青磁	碗			-	-	3.0	-	-		7.5GY8/1 明緑灰				
180		立会い	瀬戸美濃	端反Ⅲ			9.4	-	-	-	-		2.5Y8/2 灰白	精良	大窯１段階		

No.	遺構	調査地・層位	種別	器種	計測値(cm/g) 長さ	幅	厚さ	重量	遺存	石材	加工	挿図	写真図版
181		立会い	石製品	環状石製品	8.47	3.94	2.30	102.4	1/2	安山岩	全面研磨，両面穿孔	17	7
182		立会い	石製品	石帯丸鞆	2.30	3.72	0.66	10.9	完存	黒色粘板岩	裏面に擦り切り痕，他は全面研磨，潜り穴１対２か所		

No.	遺構	調査地・層位	種別	器種	計測値(cm/g) 直径	厚さ	重量	遺存度	備考	挿図	写真図版
183		立会い	銭貨	開元通寶	2.45	0.11	3.1	完存	唐銭　背右上月	17	
184		立会い	銭貨	開元通寶	2.36	0.11	3.0	完存	唐銭　背下月		
185		立会い	銭貨	□元□寶	2.38	0.12	2.6	完存			
186		立会い	銭貨	熙寧元寶	2.43	0.12	3.5	完存	北宋銭　真書		
187		立会い	銭貨	熙寧元寶	2.36	0.12	2.4	完存	北宋銭　真書		
188		立会い	銭貨	熙寧元寶	2.48	0.12	2.5	完存	北宋銭　篆書		
189		立会い	銭貨	紹聖元寶	2.37	0.14	3.2	完存	北宋銭　行書		
190		立会い	銭貨	紹□元寶	2.41	0.07	2.2	完存	背面スレ		
191		立会い	銭貨	天禧通寶	2.55	0.12	4.1	完存	北宋銭　真書		
192		立会い	銭貨	元豊通寶	2.38	0.14	3.1	完存	北宋銭　行書		
193		立会い	銭貨	元豊通寶	2.51	0.10	2.9	完存	北宋銭　篆書		
194		立会い	銭貨	元豊通寶	2.45	0.12	3.2	完存	北宋銭　篆書		
195		立会い	銭貨	元豊通寶	2.38	0.13	3.5	完存	北宋銭　篆書		

No.	遺構	調査地・層位	種別	器種	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	遺存度	木取り	加工	挿図	写真図版
196	1号土坑	3B4 1	木製品	斎串	13.1	1.4	0.3	完存	板目	末端に削り　両側縁に上方からの切り込み	17	7
197	1号土坑	3B4 1	木製品	斎串	(10.6)	1.2	0.35	上部欠損	柾目	末端に削り		
198	1号土坑	3B4 1	木製品	斎串	(12.1)	0.85	0.2	上部欠損	柾目	末端に削り		
199	1号土坑	3B4 1	木製品	斎串	(7.8)	1.0	0.4	上部欠損	板目	末端に削り		
200		17B3 Ⅱ	木製品	点け木	6.45	1.2	0.8	完存	割り材			
201		19A1 Ⅱ	木製品	点け木	7.75	1.25	0.5	完存	割り材			
202		立会い	木製品	点け木	7.8	1.65	0.85	完存	割り材			
203		立会い	木製品	箸状木製品	(8.5)	0.5	0.5	上部欠損	棒材	全面に削り		
204	2号土坑	6B1 4	木製品	棒状木製品	20.45	1.55	1.0	完存	板目	全面に削り　上下両端を尖らせる加工		
205		Z27	木製品	箸状木製品	(17.6)	0.6	0.45	上部欠損	棒材	全面に削り		
206	19号溝	18B4 1	木製品	曲物底板	(15.25)	(4.35)	0.6	1／3遺存	柾目			

第Ⅴ章　須恵器胎土分析

（株）第四紀地質研究所　井上　巖

1　実験条件

1-1　試料

分析に供した試料は表３に示すとおりである。Ｘ線回折試験に供する遺物試料は洗浄し，乾燥したのちに，メノウ乳鉢にて粉砕し，粉末試料として実験に供した。化学分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し，表面を洗浄し，乾燥後，試料表面をコーテングしないで，直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し，分析した。

1-2　Ｘ線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はＸ線回折試験によった。測定には日本電子製 JDX-8020 Ｘ線回折装置を用い，次の実験条件で実験した。

Target：Cu，Filter：Ni，Voltage：40kV，Current：30mA，ステップ角度：0.02°，計数時間：0.5 秒。

1-3　化学分析

元素分析は日本電子製 5300LV 型電子顕微鏡に 2001 型エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置をセットし，実験条件は加速電圧：15kV、分析法：スプリント法，分析倍率：200 倍，分析有効時間：100 秒，分析指定元素 10 元素で行った。

2　Ｘ線回折試験結果の取扱い

実験結果は表３に示す通りである。表３の右側にはＸ線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり，左側には，各胎土に対する分類を行った結果を示している。

Ｘ線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

2-1　組成分類

1）　Mont-Mica-Hb 三角ダイヤグラム (第 18 図②)

第 18 図②に示すように三角ダイヤグラムを１～ 13 に分割し，位置分類を各胎土について行い，各胎土の位置を数字で表した。Mont，Mica，Hb の三成分の含まれない胎土は記載不能として 14 にいれ，別に検討した。三角ダイヤグラムはモンモリロナイト (Mont)，雲母類 (Mica)，角閃石 (Hb) のＸ線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント (％) で表示する。モンモリロナイトは Mont ／ Mont ＋ Mica ＋ Hb × l00 でパーセントとして求め，同様に Mica，Hb も計算し，三角ダイヤグラムに記載する。三角ダイヤグラム内の１～４は Mont，Mica，Hb の３成分を含み，各辺は２成分，各頂点は１成分よりなっていることを表している。位置分類についての基本原則は第 18 図②上段に示す通りである。

2）　Mont-Ch，Mica-Hb 菱形ダイヤグラム (第 18 図①)

第 18 図①に示すように菱形ダイヤグラムを１～ 19 に区分し，位置分類を数字で記載した。記載不能は 20 として別に検討した。モンモリロナイト (Mont)，雲母類 (Mica)，角閃石 (Hb)，緑泥石 (Ch）の内，ａ：３成分以上含まれない，ｂ：Mont，Ch の２成分が含まれない，ｃ：Mica，Hb の２成分が含まれない，の３例がある。

菱形ダダイヤグラムは Mont-Ch，Mica-Hb の組合せを表示するものである。Mont-Ch，Mica-Hb のそれぞれのＸ線回折試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので，例えば，Mont ／ Mont ＋ Ch

× 100 と計算し，Mica，Hb，Ch も各々同様に計算し，記載する。菱形ダイヤグラム内にある１～７は Mont，Mica，Hb，Ch の４成分を含み，各辺は Mont，Mica，Hb，Ch のうち３成分，各頂点は２成分を含んでいることを示す。位置分類についての基本原則は第 18 図①左に示すとおりである。

３）化学分析結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物として，ノーマル法 (10 元素全体で 100％になる) で計算し，化学分析表を作成した。化学分析表に基づいて SiO2-Al2O3 図，Fe2O3-TiO2 図，K2O-CaO 図の各図を作成した。これらの図をもとに，土器類を元素の面から分類した。

3　X線回折試験結果

3- 1　タイプ分類

表３には下山田道下遺跡から出土した土器が記載してある。表５に示すように土器はＡ～Ｂの２タイプが検出された。Ａタイプ：Hb １成分を含み，Mont，Mica，Ch の３成分に欠ける。Ｂタイプ：Mont，Mica，Hb，Ch の４成分に欠ける。高温で焼成されているために鉱物は分解してガラスに変質しているために４成分が検出されない。

表５に示すように，分析試料のうち最も多く検出されたのがＢタイプで土器が８個該当し，次いでＡタイプの２個ある。

3- 2　石英（Qt）- 斜長石（Pl）の相関について (第 18 図③)

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質，土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で，ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって異なってくるものであり，言い換えれば，各地の砂はおのおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。

第 18 図③に示すようにＱｔの強度が小の領域から大の領域にかけて２グループと“その他”に分類された。

Qt-1：Qt が 1400 ～ 1650，Pl が 80 ～ 100 の領域に分布する。分析試料の杯蓋，甕，横瓶が共存する。

Qt-2：Qt が 2000 ～ 3500，Pl が 0 ～ 180 の領域に分布する。分析試料の無台杯，有台杯，甕が共存する。

“その他”：試料№５は焼成ランクが幾分低い。高温で焼成されると Qt-2 の領域に入る。

4　化学分析結果

表５には下山田道下遺跡から出土した土器が記載してある。分析結果に基づいて第 18 図 SiO2-Al2O3 図，第 18 図 Fe2O3-TiO2 図、第 18 図 K2O-CaO 図を作成した。

4- 1　SiO2-Al2O3 の相関について (第 18 図④)

第 18 図④に示すように，分析試料はＩタイプの領域に集中する。

Ｉタイプ：SiO2 が 60 ～ 70％，Al2O3 が 18 ～ 26％の領域に分布する。分析試料の土器が集中する。

4- 2　Fe2O3-TiO2 の相関について (第 18 図⑤)

第 18 図⑤に示すように，分析試料は Fe2O3 の領域によって，Fe2O3- １と２の２タイプに分類した。

Fe2O3- １：Fe2O3 が 4.5 ～ 9.0％，TiO2 が 0.8 ～ 1.6％の領域に分布する。分析試料の無台坏，有台坏，坏蓋，甕，横瓶が共存する。

Fe2O3 － ２：Fe2O3 が 9.5 ～ 13％，TiO2 が 0.7 ～ 1.2％の領域に分布する。分析試料の無台坏が集中する。

4- 3　K2O-CaO の相関について (第 18 図⑥)

第 18 図⑥に示すように K2O の値によって分類した。

K2O- １：K2O が 2.3 ～ 4.0％，CaO が 0 ～ 0.7％の領域に分布する。分析試料の土器が集中する。

5　組成分類

Ｘ線回折試験と蛍光Ｘ線分析結果に基づいて，下山田道下遺跡から出土した土器を表４に示すように分類した。

１）化学分析結果では試料№８と９は同じ組成をしているので五頭山麓①としたが，Qt-Pl の相関では２種類に分類された。

２）試料№４と６は Qt-Pl の相関では五頭山麓②の領域にあり，化学組成的にも類似するので五頭山麓②とした。

３）試料№７と 10 は Qt-Pl の相関では頸城系①に近く，化学組成でも同じ領域にあり，頸城系①とした。

４）試料№１・２・３は Qt-Pl の相関と化学組成も同じ領域にあり，組成的に小泊②に近く，小泊②とした

５）試料№５は Qt-Pl の相関では焼成が甘く，化学組成では頸城系③に近いようであるが組成が幾分異なるようなので，頸城系？とした。

参考文献：井上　巖 2010『中部・北陸地方の古窯跡データ集』株式会社第四紀地質研究所

表3　胎土性状およびタイプ分類表

試料	タイプ	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物												備　考	
Ｎｏ	分類	Mo-Mi-Hb	Mo-Ch,Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mull	K-fels	Hal	Au	器種名	掲載№
下山田道下－１	B	14	20						3379	79	219	63				無台杯	54
下山田道下－２	A	5	20			62			3213	53	157	73				無台杯	55
下山田道下－３	B	14	20						2874	63	111	79				無台杯	56
下山田道下－４	B	14	20						2516	142	196	61				無台杯	136
下山田道下－５	B	14	20						3554	201	223	56				折縁杯	30
下山田道下－６	B	14	20						2211	79	118	113				有台杯	138
下山田道下－７	B	14	20						1414	106	626	149				杯蓋	32
下山田道下－８	A	5	20			71			1449	95	487	194				甕	114
下山田道下－９	B	14	20						3459	84	102	107				甕	37
下山田道下－10	B	14	20						1621	96	595	136				横瓶	115

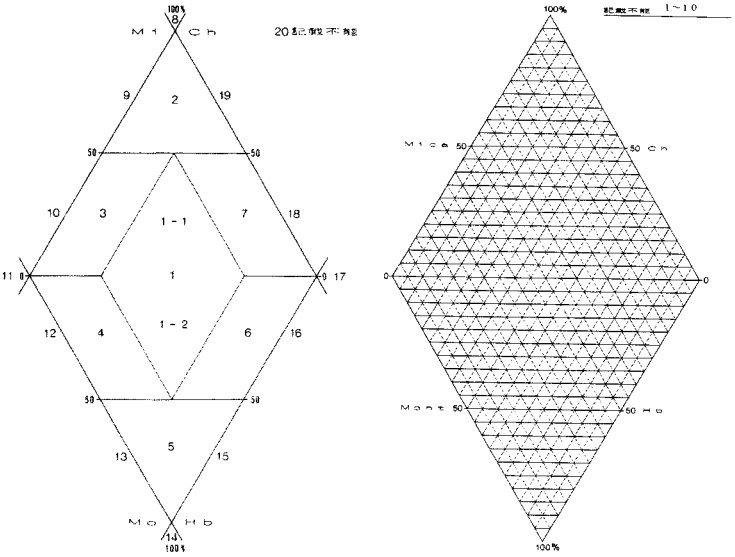
Mont：モンモリロナイト　Mica：雲母類　Hb：角閃石 Ch：緑泥石（Ch:Fe　一次反射、Ch:Mg　二次反射）Qt：石英 Pl：斜長石
Crist：クリストバライト Mullite：ムライト　K-fels：カリ長石　Halloy：ハロイサイト Kaol：カオリナイト　Pyrite: 黄鉄鉱 Au：普通輝石 Py: 紫蘇輝石 ,Talc：滑石

表4　胎土分析化学分析表

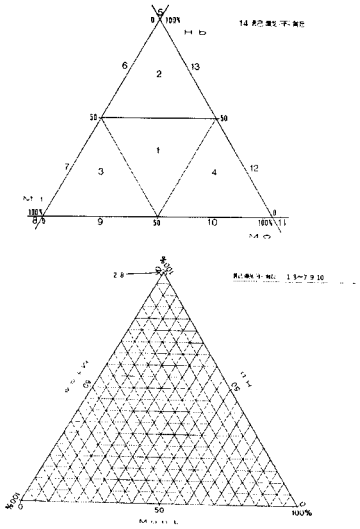
試料名	Na2O	MgO	Al2O3	SiO2	K2O	CaO	TiO2	MnO	Fe2O3	NiO	Total	器種名	掲載№
下山田道下－１	0.65	0.00	22.04	62.94	2.35	0.54	1.07	0.00	10.26	0.15	100.00	無台杯	54
下山田道下－２	0.37	0.00	20.49	60.98	3.29	0.15	1.76	0.09	12.59	0.27	99.99	無台杯	55
下山田道下－３	0.65	0.00	18.45	64.93	3.14	0.24	1.67	0.95	9.97	0.00	100.00	無台杯	56
下山田道下－４	1.40	0.00	23.56	64.60	3.27	0.24	0.80	0.06	6.07	0.00	100.00	無台杯	136
下山田道下－５	0.65	0.00	23.43	64.23	3.33	0.31	0.75	0.41	6.89	0.00	100.00	折縁杯	30
下山田道下－６	0.56	0.00	21.36	68.84	3.81	0.30	1.04	0.00	4.09	0.00	100.00	有台杯	138
下山田道下－７	0.95	0.00	19.70	67.86	2.92	0.44	1.28	0.55	6.29	0.00	99.99	杯蓋	32
下山田道下－８	0.46	0.00	25.22	65.00	3.18	0.53	1.14	0.20	4.27	0.00	100.00	甕	114
下山田道下－９	0.34	0.00	24.07	65.69	3.28	0.29	1.23	0.34	4.49	0.26	99.99	甕	37
下山田道下－10	1.12	0.00	21.65	66.79	2.71	0.65	1.19	0.00	5.36	0.52	99.99	横瓶	115

表5　胎土分析組成分類表

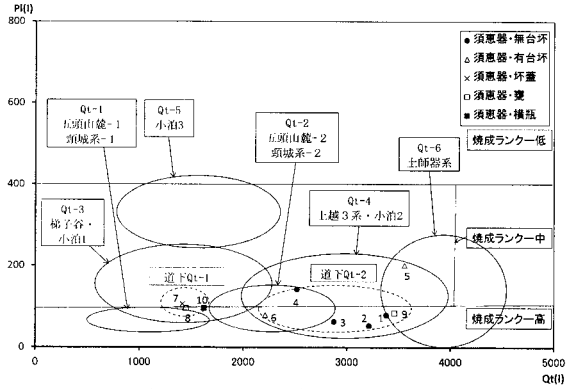
試料 No	タイプ分類	備考 器種名	対比結果	掲載No.	試料 No	タイプ分類	備考 器種名	対比結果	掲載No.
下山田道下－8	A	甕	五頭山麓①	114	下山田道下－10	B	横瓶	頸城系①	115
下山田道下－9	B	甕	五頭山麓①	37	下山田道下－1	B	無台杯	小泊②	54
下山田道下－4	B	無台杯	五頭山麓②	136	下山田道下－3	B	無台杯	小泊②	56
下山田道下－6	B	有台杯	五頭山麓②	138	下山田道下－2	A	無台杯	小泊②？	55
下山田道下－7	B	杯蓋	頸城系①	32	下山田道下－5	B	有台杯	頸城系？	30



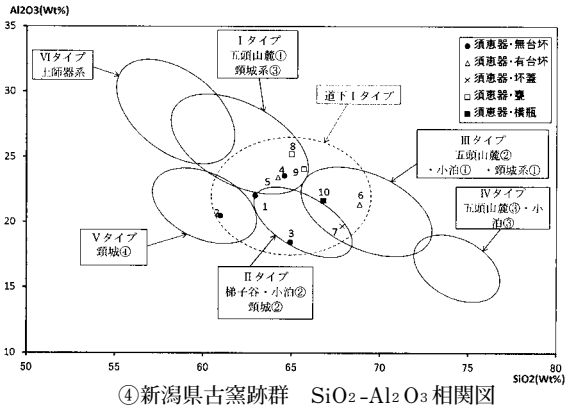
①Mo-Ch,Mi-Hb　菱形ダイヤグラム



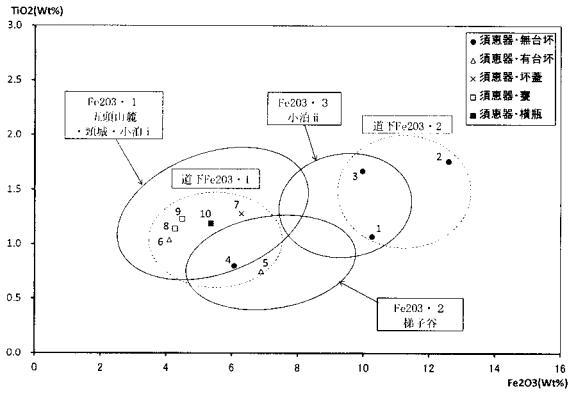
②Mo-Mi-Hb　三角ダイヤグラム



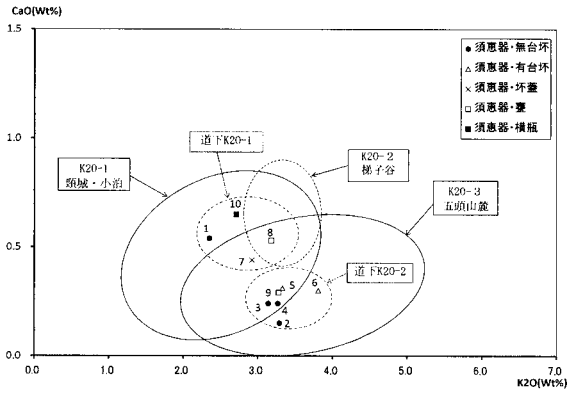
③新潟県古窯跡群　Qt-Pl相関図



④新潟県古窯跡群　SiO_2-Al_2O_3相関図



⑤新潟県古窯跡群　Fe_2O_3-TiO_2相関図



⑥新潟県古窯跡群　K_2O-CaO相関図

第18図　須恵器胎土分析　関連グラフ

第Ⅵ章　ま　と　め

出土土器の位置付け　今回の調査で得られた遺物は，遺構出土はわずかで遺構外出土が大半を占める。ここでは，これらのうち工事立会い出土ながらも一括性の高い「南集中資料」（第 13 図 54 ～第 15 図 115）について若干の検討を加えたい。

南集中資料は，先述のとおり自然流路跡に包含されていたと考えられる土器群で，極めて狭い範囲からまとまって見つかった。発見された状態および構成土器の類似性から考えて一括の資料と捉えられよう。

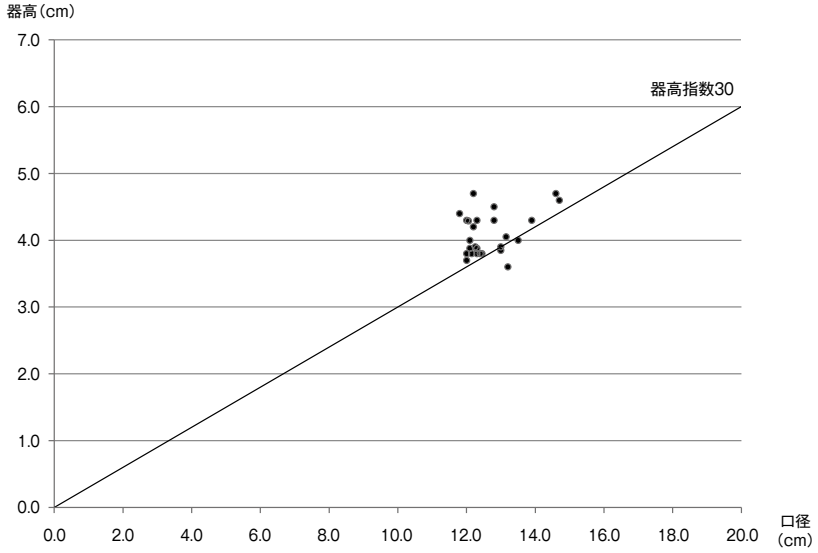
このうち図示した遺物は，須恵器無台杯３点・有台杯１点・大甕１点・横瓶１点，土師器無台椀 27 点・無台皿１点・有台皿１点，黒色土器無台椀 11 点・無台鉢２点・有台椀 10 点・有台皿４点である。このうち食膳具の比率は，須恵器６％・土師器 44％・黒色土器 50％であり，土師器・黒色土器の卓越が顕著である。

須恵器無台杯は３点ともに口縁部が開く浅身で薄作りな点から，小泊窯跡群のカメ畑１号窯から江ノ下窯段階に相当すると思われる。また，いずれも胎土分析結果から小泊窯跡群産と考えられる。

土師器無台椀は，口径指数 30 を若干上回るボウル形の椀が大多数を占めるが，器形は崩れておらず比較的丁寧な作りが多い。黒色土器Ａ類の無台椀は，口径が 12cm 以下の小型品と 14cm 以上の中型品に分かれる。いずれも外面をロクロケズリ，内面にはヘラミガキを行っており，一部は外面にもミガキがみられる。黒色土器Ｂ類の有台椀は，いずれも内外面ともにミガキを施した削り出しの平高台を持つもので，腰部が丸みを持ちつつ口縁部が強く外反するものが多い。このＢ類有台椀は，「沼垂郡域特有の器形」（水澤ほか 2001）とされているが，分布をみると一部の例外を除けば胎内市南部から阿賀野市北部にかけての狭い範囲にほぼ限定される。細かな地域性を示す資料といえるだろう。

これらの特徴は，近隣では新発田市坂ノ沢Ｃ遺跡 10 号土坑出土遺物（渡邊 2001）や胎内市船戸川崎遺跡４次調査の川跡３段階の土器群（水澤 2002）などに類似する。これらは概ね春日編年（春日 1999・2005）のⅥ３期に併行すると考えられており，本資料もこの段階に位置づけられる。年代的には９世紀後半から 10 世紀初頭にかけての時期といえよう。

遺構出土およびその他の土器についてみると，部分的には南集中資料に先行するものもみられるが，全体的には同様の器種組成・特徴を有している。食膳具についてみると土師器・黒色土器が大半を占め，須恵器の割合は低い。土師器や黒色土器は，南集中資料と同様の器形が多く，須恵器は，在地産と考えられる無台杯が希少で，多くが小泊産と考えられる。在地産としては折縁杯が散見されるが，器形から新相を示す資料といえる。煮炊具では，長胴甕が少なく小甕と鍋の存在が目立つ。遺構外の遺物では，図示した土器は少ないが春日編年Ⅴ期に帰属する資料も散



第 19 図　土師器無台椀の器高指数（南集中資料）

見できる。よって，Ⅴ期に集落が成立しⅥ期に盛興を迎えたことが窺われる。

遺跡の位置付け　今回の調査は，調査範囲が狭小であることから建物などを検出できず集落の実態に迫ることはできなかった。検出された遺構はいわゆる畝状の小溝が主体で，いくつかのまとまりをもつことが明らかとなった。他遺跡の例を踏まえれば畑等の痕跡と考えられる。９世紀後半には「律令型村落」が衰退し，屋敷地に生産域を付帯する「王朝国家型村落」が沖積地に展開する時期（坂井 1999）とされるが，本遺跡のあり方もこれに符合した動きとみることができよう。これらの動きは，若干の前後はあるものの七社遺跡をはじめとした周辺遺跡の消長とも合致し，時代の画期を示すものといえるだろう。

本遺跡からは，小片ながらも漆紙付着の土器，緑釉陶器，石帯などの庶民的な集落を想定し難い遺物も出土している。北側に接する七社遺跡は，本遺跡とは時期的にも距離的にも密接な関係にあり一体的に扱うべき遺跡であるが，九九算を記した木簡が出土し注目される（田中・笹澤 2010）。これらの遺物からは，新田開発を主導したであろう有力者の存在が窺われる。

下山田道下遺跡は，今回の発掘調査では集落の実態に迫る遺構は検出できなかったが，出土遺物からは一般集落を凌駕する内容も得られている。また，確認調査の結果からは 65,000㎡という広大な遺跡と判明しており，沖積地の開発か進められた９世紀代の当地域において，中心的な役割をもつ有力な集落であったと推察される。

主要参考文献

飯坂盛泰ほか 2002『蔵ノ坪遺跡』新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

小田由美子ほか　2006『滝寺古窯跡群・大貫古窯跡群』新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　1999「土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会

春日真実 2005「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について」『新潟考古』第 16 号

春日真実・滝沢規朗ほか 2004『野中土手付遺跡』加治川村教育委員会

国土地理院　1993『1：25,000　土地条件図　新発田』

坂井秀弥ほか 1989『山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会

坂井秀弥 1999「古代　総論」『新潟県の考古学』新潟県考古学会

佐藤友子ほか 2005『野中土手付遺跡・砂山中道下遺跡』新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

笹澤正史 2011「まとめ」『空毛遺跡発掘調査報告書』新発田市教育委員会

高浜信行・卜部厚志　2002「湖底に沈んだ縄文遺跡－青田遺跡の立地環境－」『シンポジウム「よみがえる青田遺跡」川辺の縄文集落』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育委員会

滝沢規朗 2005「土器の分類と変遷」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会

田中耕作・笹澤正史 2010『七社遺跡発掘調査報告書』新発田市教育委員会

鶴巻康志ほか 2003『桑ノ口遺跡発掘調査報告書』新発田市教育委員会

鶴巻康志ほか 2006『太田遺跡・箱館跡発掘調査報告書』新発田市教育委員会

新潟古代土器研究会　2004『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会

水澤幸一・吉村光彦 2001『船戸桜田遺跡２次』中条町教育委員会

水澤幸一 2002『船戸川崎遺跡４次』中条町教育委員会

水澤幸一・吉村光彦 2002『船戸桜田遺跡４・５次　船戸川崎遺跡６次』中条町教育委員会

湯原勝美・折原洋一ほか 2010『西部遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

渡邊美穂子 2001『坂ノ沢Ｃ遺跡Ⅱ』新発田市教育委員会

調査区遠景（西から）

22 区　基本土層（西から）

2 ～ 5 区　完掘状態（南西から）

23 区　26 号溝土層断面（北から）

23 区　包含層遺物出土状態（南東から）

完掘状態（南から）

緑釉陶器

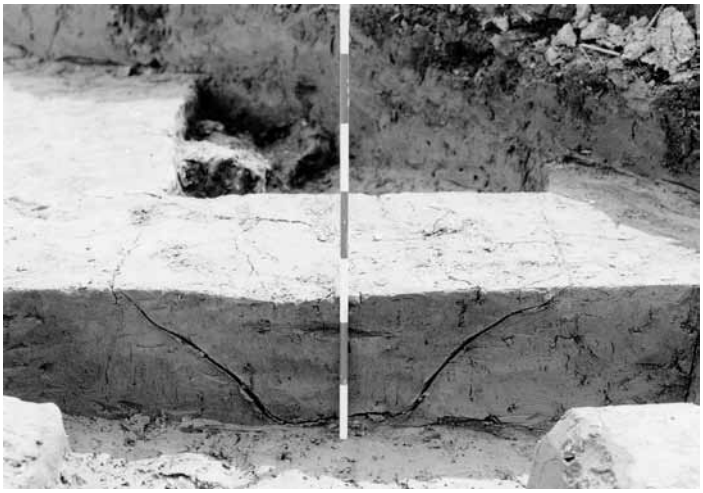
漆紙付着黒色土器（左）・漆付着須恵器（右）

図版２　発掘調査の状況・検出遺構（１）

表土掘削状況（南から）

調査区近景（南西から）

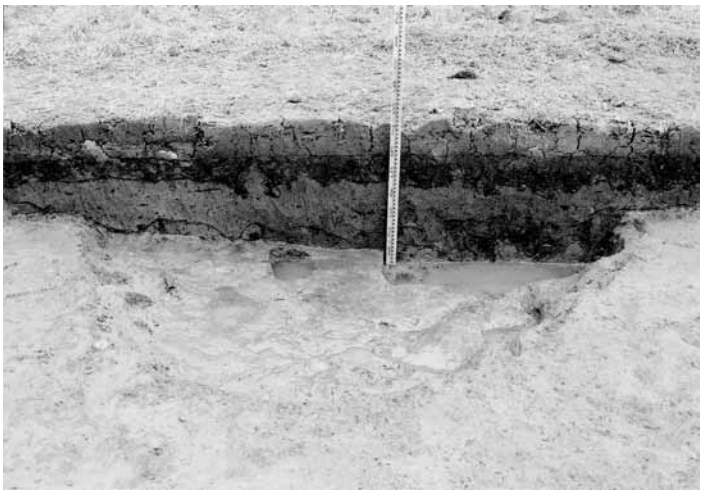
１～５区　調査状況（南から）



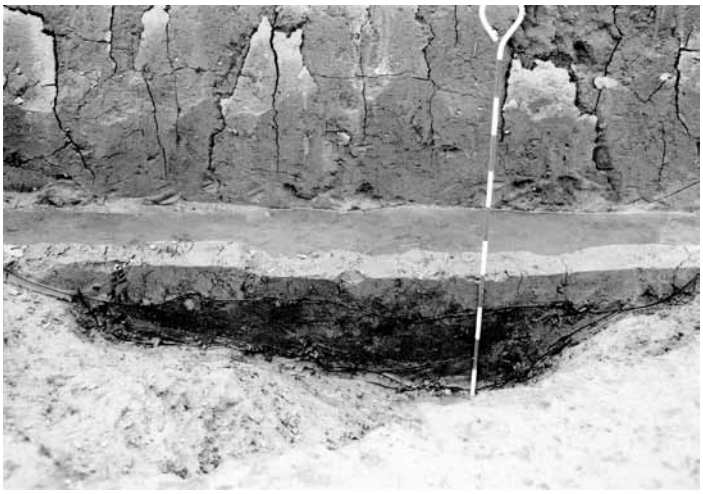
２号溝　土層断面（北東から）

３号溝　土層断面（北東から）

１号土坑　斎串（196）出土状態（北から）



１号土坑　完掘状態（西から）

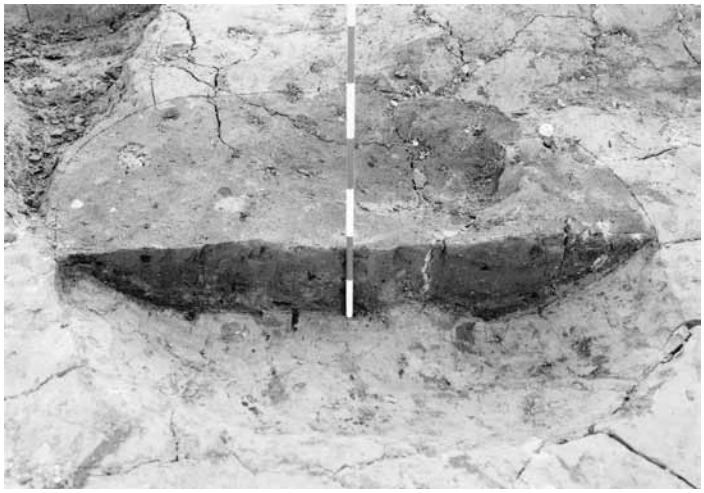


３号土坑　土層断面（東から）

11 ～ 18 号溝　完掘状態（北から）

12 ～ 14 号溝　土層断面（南から）

22 区　20 ～ 24 号溝　完掘状態（南から）



5 号土坑　土層断面（北から）

26 号溝　遺物出土状態（北から）

25 号溝　土層断面（北から）

23 区　完掘状態（西から）

完掘状態（南東から）

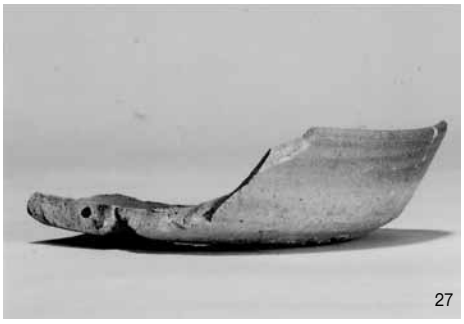
図版４　　出土遺物（１）

1

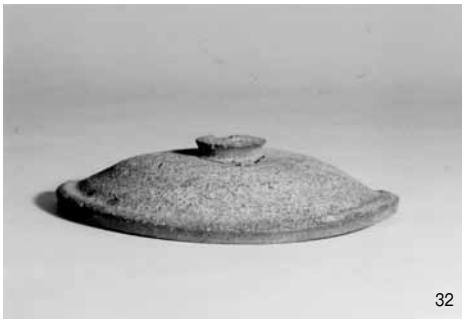
23

24

26

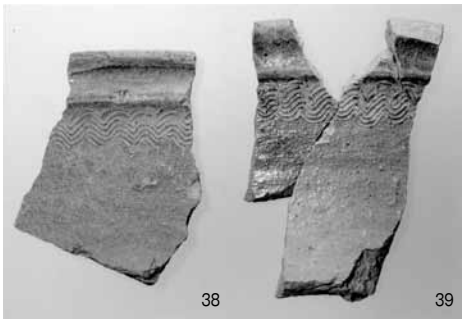

27

30


32

33

37


38 39

40

42

43

45

54

56

58

60

61

63

64

65

67

68

70

71

75

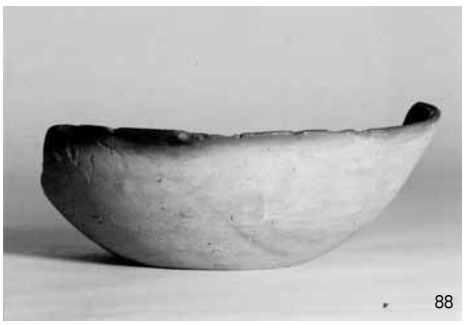
77

80

85

86

87


88

90

92

96

図版６　　出土遺物（３）

98

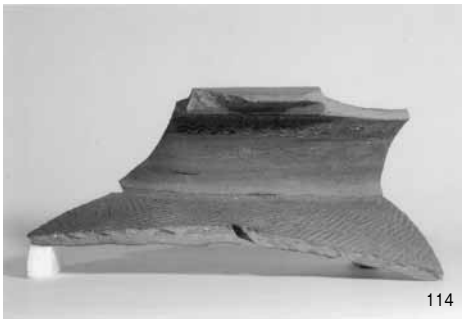
100

101

103

109

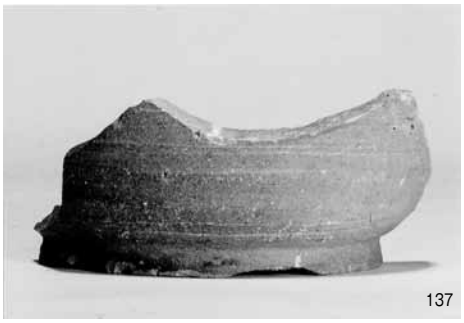
111


114

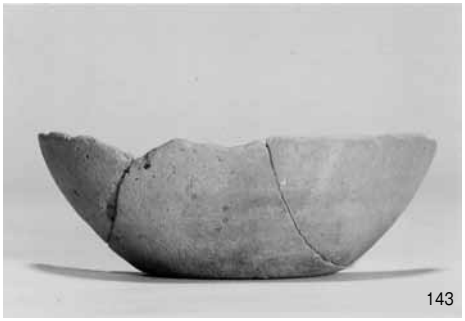
115

116

125


137

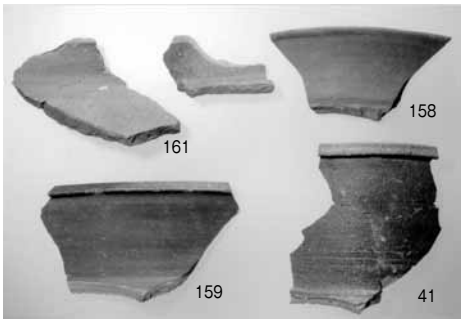
138

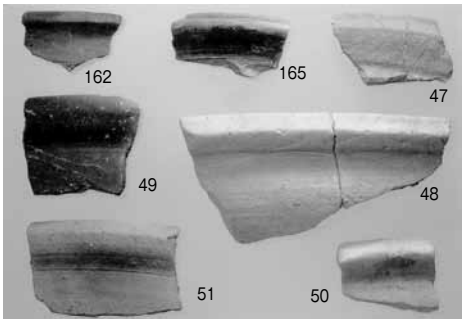

143

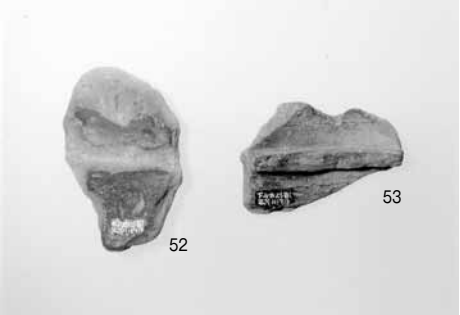
144

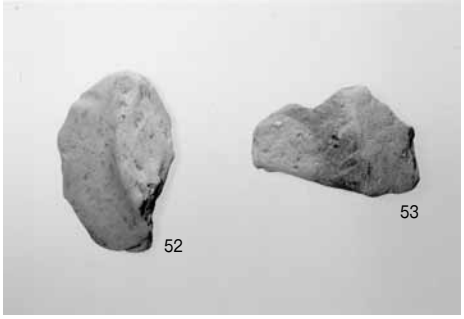
147

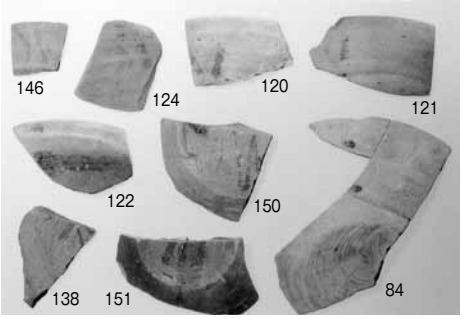
162

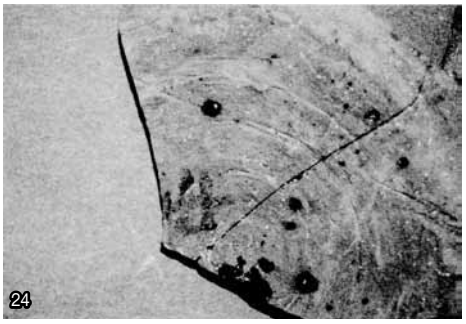

158
161
159
41


162
165
47
49
48
51
50

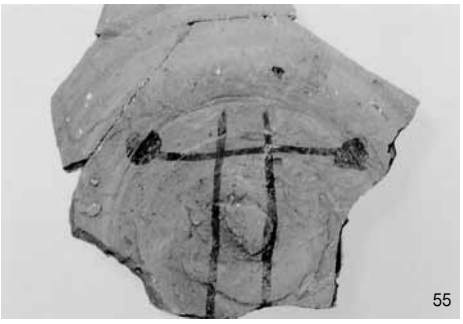

52
53


52
53


146
124
120
121
122
150
138
151
84


24

54

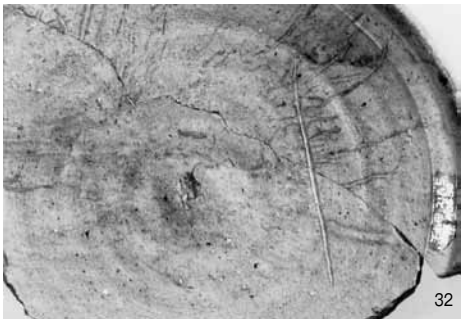

55

58

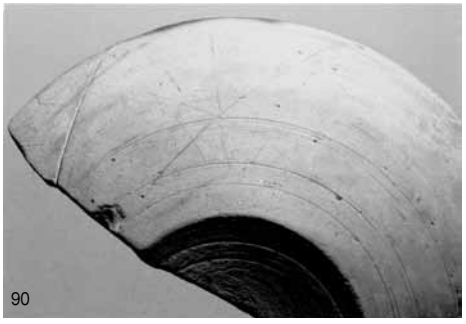
59

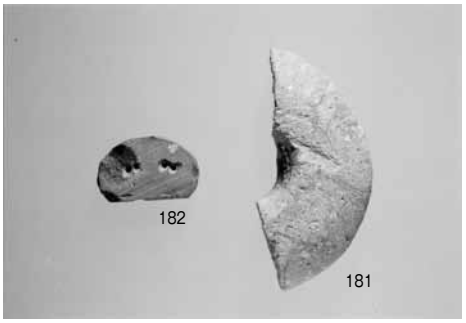
88

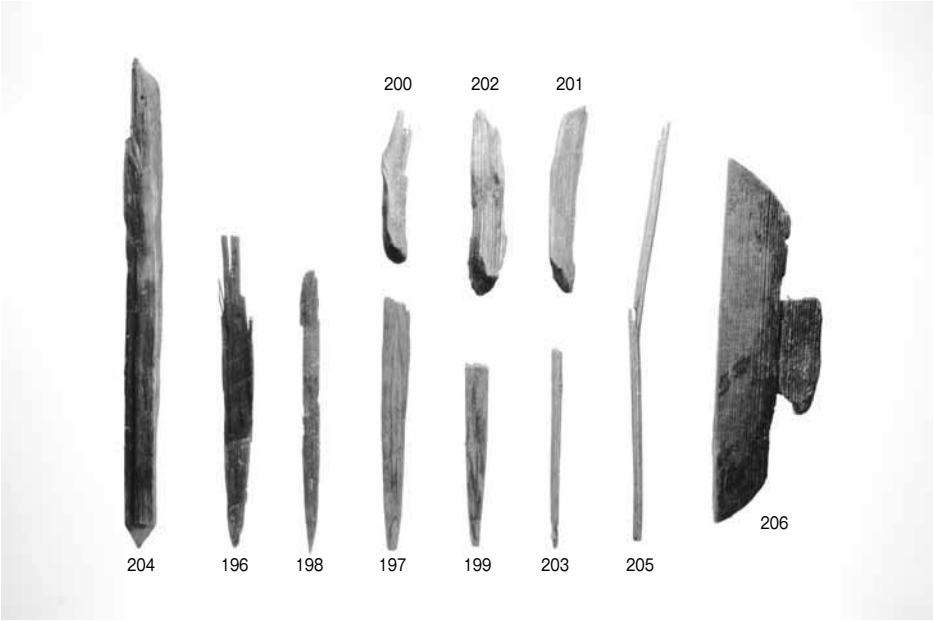
145


32

136


90


182
181


200
202
201
204
196
198
197
199
203
205
206

報 告 書 抄 録

ふりがな	しもやまだみちしたいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	下山田道下遺跡発掘調査報告書
副 書 名	県営ほ場整備事業（加治川地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　V
シリーズ名	新発田市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第 48
編 著 者 名	鈴木　暁・一箭義貴・井澤 昇・井上　巌（株式会社第四紀地質研究所）
編 集 機 関	新発田市教育委員会（教育部　生涯学習課　文化行政室　埋蔵文化財係）
所　在　地	〒959－8686　新潟県新発田市乙次 281 番地 2　　TEL. 0254-22-9534
発行年月日	平成 25（2013）年３月 15 日
体　　裁	Ａ４判　横組１段　本文 36 頁　写真図版７頁

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
下山田道下遺跡（しもやまだみちしたいせき）	新発田市下山田 1000 番地ほか	15-206	657	37° 59′ 04″	139° 22′ 18	20110602 ～ 20110720（30 日間）	606㎡	県営ほ場整備事業（加治川地区）

遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下山田道下遺跡（しもやまだみちしたいせき）	集落跡	古墳時代		土師器（前期）	
		平安時代	土坑５基、溝 28 条 ピット 10 基	土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・木製品・石帯	
		中世		青磁・白磁・瀬戸美濃・古銭	

要　約

下山田道下遺跡は，新発田市下山田から住田にかけて所在する古墳時代から中世にかけての集落跡で，平成 23 年に県営ほ場整備事業（加治川地区）に先立ち本発掘調査が実施された。調査の結果，平安時代（9 世紀後半から 10 世紀初頭）を中心とした集落跡が検出された。しかし，調査面積が狭小であり，調査区が遺跡の末端部にあたるため集落の実態は明らかにしえなかったが，畝状小溝群の存在からは，建物の周囲に畑地を配する農耕集落の様子が垣間見える。出土遺物は土師器無台椀を主体とし，黒色土器（内面・両面）が多く伴う。両面黒色土器は，有台椀の多く見られることが特徴である。一括性のある資料も含まれており，当該期の土器編年を考えるうえで良好な資料といえよう。また，断片的ながらも漆紙や緑釉陶器，石帯などが出土していることから有力者の存在が窺われ，新田開発における中心的な役割を担った集落と考えられる。

下山田道下遺跡 発掘調査報告書

県営ほ場整備事業（加治川地区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 V

発　行　　平成 25（2013）年３月 15 日
新発田市教育委員会
新潟県新発田市乙次 281 番地 2
印　刷　　株式会社　天野印刷

本書は、本文・図版ともに中性紙を使用しています。